青少年の生き方を支える「家族の絆」の構築戦略

研究調査報告書

2010 年 3 月

(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
研究調査本部　共生社会づくり政策研究群

研究体制

研究責任者		共生社会づくり政策研究群
研究指導者	野々山久也	甲南大学教授
	神原文子	神戸学院大学教授
研究者	成瀬千枝子	共生社会づくり政策研究群 主任研究員
	齋藤華織	特別研究員（竹中工務店）

目次

序 1
第 1 章　先行研究の整理と本調査研究の目的 2
1. 家族の絆に関する先行研究 2
2. 本調査研究の目的 4
第 2 章　調査研究の方法 5
1. 調査設計 5
(1) 調査手法 5
(2) 調査対象者 5
(3) 調査対象者の選定 5
(4) 配布および回収の方法 5
(5) 調査時期 5
(6) 回収状況 5
2. 回答者属性 6
(1) 性別 6
(2) 学年 6
(3) 居住地域 6
3. 本報告書の構成 6
第 3 章　家族の形、家族の存在および家族との関係性 7
1. 家族の形 7
(1) 同居家族人数 7
(2) 世帯類型 7
(3) 家族認識 9
2. 家族の存在 14
3. 家族との関係性 18
(1) 家族との共有行動 18
(2) 親との信頼関係 24
4. まとめ 30
第 4 章　家族の絆の強弱感 32
1. 属性と家族の絆の強弱感 32
2. 家族との関係性と家族の絆の強弱感 34
(1) 家族との共有行動と家族の絆の強弱感 34
(2) 親との信頼関係と家族の絆の強弱感 37
3. まとめ 38
第 5 章　家族の絆の強弱感と自己評価――自己肯定感と自立力―― 39
1. 自己評価――自己肯定感と自立力―― 39
2. 家族の絆の強弱感と自己評価 44
3. まとめ 49

第 6 章　家族の絆の構築方法と理想とする家族の絆のあり方について 51
1. 家族の絆が強まった経験 51
2. 理想とする家族の絆のあり方 53
(1) 家族成員間の関係性の状態について 53
(2) 家族成員間の関係性のイメージについて 54
(3) 家族成員間の関係性を具体化した行為 55
(4) その他 55
3. まとめ 56
第 7 章　まとめと提言 57
1. 分析結果のまとめ 57
2. 提言 58
おわりに 60
引用文献 61
資料 62
1. 質問紙 62
2. 単純集計 71

序

今日の青少年をとりまく生活環境は経済的な面では昔に比べて豊かになった。衣食住のすべてにおいて快適な生活を送り、それほど努力しなくても欲しいものは手に入るという環境の中で暮らしている。

しかしながら、豊かな環境にいるにもかかわらず、現代の子どもたちは自信が持てなかったり、不安であったり、将来に希望を持てないと言われ、日本の子どもは幸福度が最低レベルとの見方もある（古荘　2009　3-11)。自分に対する肯定的感覚いわゆる自己肯定感も学年が進行するとともに減り、否定的にとらえる子が多くなっているという（山田 2001：　227)。

また、最近、青少年の学力および体力の低下、生活習慣の乱れ、いじめ、虐待および家庭内暴力、不登校、ひきこもり、アルコールや薬物依存、非行、犯罪など、青少年に関する社会問題が頻繁に報道されている。

現代の子どもたちをめぐるこうした諸問題の要因の一つとして、大抵「家族の崩壊」、「家族の絆の弱体化」が挙げられる。すなわち、家族の形が変わり家族の凝集力、結束力が弱まったから、青少年がさまざまな問題を起こすようになったと指摘されるのである。

本調査研究は、こうした現状をふまえて、兵庫県の中高生を対象として、今日の青少年の視点から見た、家族の形および家族との関係、家族の絆の強弱感、家族の絆の強弱感と自己評価との関連性、「家族の絆」の構築方法、理想の「家族の絆」のあり方について考察したい。

社会状況が急速に変容する今日において、青少年の視点から家族と家族の絆について問い直すことは、青少年の健全育成のためにだけにとどまらず、家族を構成する他の成員および家族をとりまく地域社会、国のあり方を考える上においても有意義であるといえよう。

第１章　先行研究の整理と本調査研究の目的

1. 家族の絆に関する先行研究

家族の絆とはいったい何なのだろうか。これまで、多くの研究者や識者によって家族に関する調査研究が行われてきた。家族といえば絆がまず連想される。しかしながら、家族の絆はある事象の原因あるいは結果として論じられることが多く、家族の絆そのものを対象とした調査研究はきわめて少ない。すなわち、家族の絆が弱いからもしくは強いから、このような結果が生まれたとか、反対に、このような事件、体験を経て家族の絆が強くなった、弱くなったというように言及され、「家族の絆」とはいったいどのようなものなのかという点についてはあまり触れられることはなかった。

「家族の絆」に関する数少ない先行研究の中で、代表的な研究として、家族社会学的アプローチによる山田（2001）の研究、心理学的アプローチによる柏木・永久(1996)の研究、社会学的アプローチによる財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所(2002)の実証的調査研究が挙げられる。

山田は絆を「長期的に安定した信頼できる関係性」と定義し、具体的には「経済的には、困ったときに助け合うというセーフティネットであり、心理的には心の拠り所」と表現することができると述べている（山田　2001：　3)。その上で、山田は、歴史的に見れば「伝統社会では、きずなはイエやムラ、親族などの共同体が提供し、宗教が下支えしていた」が、「社会が近代化され、共同体から離脱する自由を獲得したとき、人々は、安定した信頼関係を小規模な家族に求めた」として、家族的な絆は近代社会特有のものであると指摘している（山田　2001：　4-7)。

現在の我々の日常の生活感覚からしても、今日では人生のかけがえのない情緒的絆がもっぱら家族内の間に限定されがちであり、家族内と家族外との関係は明確に区別されている。したがって、現代においては、人が何らかの問題に直面したとき――青少年にかかわる種々の社会問題から少子化、晩婚化、介護や子育てに至るまで――、「家族の内部の問題」として最初に家族にその解決が求められる。結果、家族というまとまりが強調されるあまり、すべてを家族が負わなければならないかのような状況を生み、家族は疲弊し、個人はますます生きにくくなるということが実感として広がっているといえる。

また、山田は「家族の絆」のつくられ方についても、次のような貴重な言及をしている。昔は生活環境があまり豊かでなく、家族関係も今日とは異なっており、「家族生活がだんだん豊かになっていく中、家族揃ってたまにおいしいものを食べる喜び、新しいモノがイエに入った喜びなどでコミュニケーションが深まり」、家族が豊かな生活を目指すことによって、家族の絆が自然とつくられていった。」（山田　2001：　229)。

この山田の言及は、逆に言えば、「到達すべき具体的目標がなく、努力してもこれ以上豊かな生活はできない」現代では、「家族の絆」はもはや自然にはつくられないということを示唆している。

一方、心理学的なアプローチから「家族の絆」を実証的に研究した柏木・永久(1996)は、「家族および家族以外の人との間で、相互に『支え』のやりとりがなされている関係を『絆』

と定義することとする」とし、首都圏在住の 50 歳から 70 歳までの既婚女性 21 名を対象に半構成的面接法を行い、「家族の絆」と『家族以外の人との絆』について以下のことを明らかにしている。

「既婚女性における『家族の絆』は、次のような『支え』をやりとりする関係だと言えよう。①家事・育児・介護・家族への責任などの生きることに関する「道具的支え」を提供し、そのことによって自分の役割のある、また必要とされる『満足感という支え』を得ている、②たとえどんな状態になろうとも、家族である限り、相手との関係を切ることができない、という『責任という支え』を提供しているが、同時に自分自身も、『どんな自分であっても家族から見捨てられることはない』という『責任・保護』『安心感』という支えを得ている、③家族メンバーの喜び・悲しみ・歴史などを共有する、という『支え』を提供し、また、得ている。以上のような内容から、『家族の絆』の機能とは、『生きるための道具的支え』『経済的支え』『責任・保護』『家族の歴史の共有』と、それらから生じる『安心感』であることが推測できる」と述べている（柏木・永久　1996：　113)。

また、「『家族以外の人との絆』の機能とは、『楽しさ』『新しい知識の世界』といった、より豊かに生きるための、精神的『支え』のやり取りであるといえる」と述べている（柏木・永久　1996：　113)。また、『情緒的な支え』は必ずしも家族が最大限の供給源ではなく、友人など家族以外の人からも得ていることを指摘している（柏木・永久　1996：115)。

「家族の絆」と「家族以外の人との絆」に分けて、それぞれの機能を実証的に明らかにした点は画期的研究といえる。ただ、柏木、永久自身が述べているように、調査対象のほとんどが専業主婦であり、この研究結果が「性別役割分業によって、夫婦が別々の世界に生きてきた」専業主婦に限られる可能性があることは否めない。

次に、社会学的アプローチによる財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所(2002)の「家族の絆」に関する実証的調査研究では、「絆」の字義および山田、柏木・永久による研究をふまえて、家族の絆を次のように定義している。

「家族成員の間に存在する長期的に安定した信頼できる関係性、およびこのような関係性を作り出す、または維持させるための人びとの意識と行動」

その上で、兵庫県在住の 30 歳以上 70 歳未満の有配偶男女 3,000 人を対象としたアンケート調査の結果、「家族の絆」を「役割としてのきずな」（夫や妻という役割を果たすことによって感じられるきずな）と「コミュニケーションとしてのきずな」（コミュニケーションをすることによってもたらされるきずな）の二つに分け、「役割としてのきずな」は性別役割分業規範が強いか弱いかによって多様化し、「『コミュニケーションとしてのきずな』は「どの世代においても大きな比重を占め」、夫婦、親子、家族全体に普遍化」していると論じている（財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所　2002：　99-102)。

この調査研究では、「家族の絆」自体に焦点をあて、「家族の絆」を「夫婦の絆」と「親子の絆」の二つに分けて、それぞれにおける「コミュニケーションとしてのきずな」と「役割としてのきずな」の比重を次のように明らかにしている。

夫婦の絆に関しては、①「役割としての絆」と「コミュニケーションとしての絆」は異なった比重を占めており、後者のほうが前者より大きな比重をもつ、②「コミュニケーションとしての絆」は一貫した傾向をもつが、「役割としての絆」はそのような一貫性がなく、妻の就労形態などによって多様化している（財団法人　ヒューマンケア研究機構　家庭問題研究所　2002：　39-40）。

一方、親子の絆に関しては、①親子関係においても「コミュニケーションとしての絆」と「役割としての絆」が異なった比重をもち、前者が大きな比重を占めている、②親子の絆は性別、地域、ライフステージによって異なっている（財団法人　ヒューマンケア研究機構　家庭問題研究所　2002：　50）。

ただ、先にも述べたように、調査対象者は兵庫県在住の30歳以上70歳未満の人であり、青少年にとっての親あるいは祖父母を対象としたものであり、それ以外の世代――青少年を対象としたデータがとられていない。

山田、柏木・永久、財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所(2002)による調査研究における「家族の絆」の定義を検討した結果、本稿では、前述した、財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所による「家族の絆」の定義に基づいて考察を進めていきたい。

2. 本調査研究の目的

以上の先行研究をふまえて、本調査研究では、これまで「家族の絆」研究では対象とされてこなかった青少年を対象として、青少年から見た家族の形や家族との関係はどのようなものなのか、今日の青少年は「家族の絆」が強いと感じているのかそうでないのか、「家族の絆」と青少年の自己肯定感と何らかの関係があるのか、また、青少年たちは「家族の絆」がどのように構築されるものと考えているのか、彼らにとっての理想的な「家族の絆」はどのようなものなのかについて明らかにしたい。

最終的には、本調査研究によって得られた知見がひろく地域社会における青少年の健全育成に活かされることをねらいとしている。

第２章　調査研究の方法

1. 調査設計

(1) 調査手法

質問紙調査。

(2) 調査対象者

兵庫県の中学校および高校に通う生徒、3,513 人。

(3) 調査対象者の選定

調査対象者は学校単位で選定した。調査対象校は、兵庫県の義務教育課および高校教育課を通じてアンケート調査協力を得られた公立中学校 4 校（都市部 2 校、非都市部 2 校）、高等学校 12 校（都市部 6 校、非都市部 6 校）、および当研究機構を通じてアンケート調査協力が得られた私立中学校 1 校、高校 1 校（いずれも都市部）である。公立中学校の 4 校および私立中学校、高校には全校生徒に配布し、公立高等学校は 1 校につき 120 人として、全学年に均等に割り当て配布した。

(4) 配布および回収の方法

当研究機構より各学校に質問紙を送付し、学校側が生徒に質問紙を配布した後、回収は各自の郵送による（無記名）。ただし、私立中学校、高校においてのみ、学校で一括して配布、回収を行った。

(5) 調査時期

2009 年 9 月中旬から 10 月下旬まで。

(6) 回収状況

配布票数 3,513 に対し、有効回収票数は 2,558、有効回収率は 72.8%であった。学校別回収率は表 1 のとおりである。

表 1　調査対象校別の質問紙配布と回収状況

	配布数	有効回収票数	有効回収率
都市部公立中学校	439	200	45.6
郡部公立中学校	454	391	86.1
都市部私立中学校	553	496	89.7
都市部公立高校	720	304	42.2
郡部公立高校	720	561	77.9
都市部私立高校	627	606	96.7
合計	3,513	2,558	100.0

2. 回答者属性

(1) 性別

男子 1,817 人（71.0%）、女子 706 人（27.6.0%）、不明 35 人（1.4%）、合計 2,558 人(100.0%)である。

(2) 学年

中学 1 年 360 人（14.1%）、中学 2 年 382 人（14.9%）、中学 3 年 334 人（13.1%）、高校 1 年 461 人（18.0%）、高校 2 年 577 人(22.6%)、高校 3 年 412 人（16.1%）、不明 32 人（1.3%）である。

(3) 居住地域

但馬 366 人（14.3%）、丹波 9 人（0.4%）、阪神北 109 人(4.3%)、阪神南 591 人(23.1%)、神戸 488 人(19.1%)、北播磨 7 人（0.3%）、中播磨 44 人（1.7%）、西播磨 331 人(12.9%)、東播磨 333 人(13.0%)、淡路 118 人(4.6%)、大阪 37 人(1.4%)、不明 125 人（4.9%）となっている。大阪は、兵庫県に通ってくる私立中学校、高校の学生である。

3. 本報告書の構成

本報告書は以下のような構成になっている。

第 1 章では、先行研究を整理し、その課題を明らかにした上で、本調査研究の目的を述べている。

第 2 章では、本調査研究の方法論について述べ、調査手法、調査対象者、回答者の属性、報告書の構成を説明している。

第 3 章では、中高生の視点から見た家族の形、家族の存在および家族との関係について考察している。

第 4 章では、中高生における家族の絆の強弱感を属性、親との関係性から分析を行っている。

第 5 章では、家族の絆の強弱感と自己評価――自己肯定感、自立の力――の関連性について検討している。

第 6 章では、中高生の視点から見た家族の絆の構築方法と理想とする家族の絆のあり方について検討している。

第 7 章では、本調査研究のまとめと導き出された提言を述べている。

なお、全章にわたって、クロス集計では、「不明」を省いているので、合計が異なることをことわっておきたい。

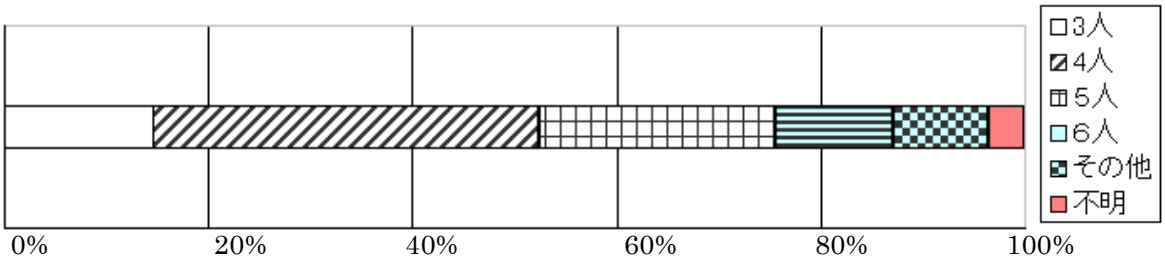
第３章　家族の形、家族の存在および家族との関係性

1. 家族の形

(1) 同居家族人数

まず、図１に示すように、同居家族人数は４人がもっとも多く 37.8%、次に５人が 23.2%、３人が 14.6%となっている。

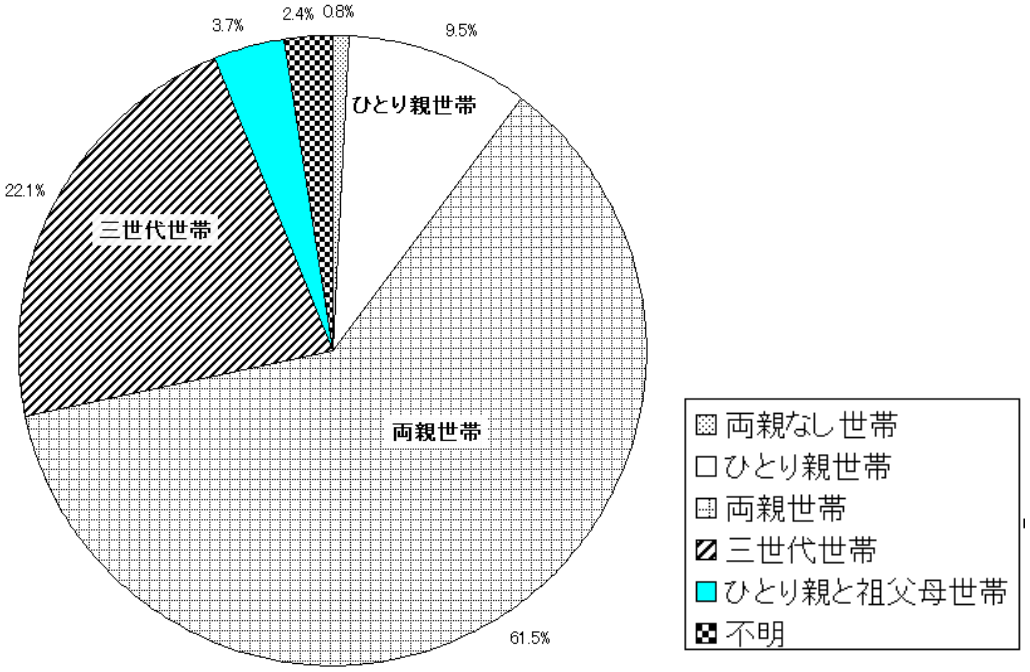
図１　同居家族人数



(2) 世帯類型

世帯類型を見てみると、図２に示すように、両親と同居している両親世帯が 61.5%(1,573 人)を占め、次に三世代世帯が 22.1%（566 人）、ひとり親世帯が 9.5%（243 人）である。また、ひとり親と祖父母の世帯が 3.7%（94 人）、両親なし世帯が 0.８%(20 人)となっている。

図 2　世帯類型



また、選択肢の中に「その他」として自由に解答してもらったところ、ペットを同居家族とする者が 44 人（1.7%）、そのうちの 36 人が犬を挙げている。[1]戦前は大家族が比較的多かった上、家族とは一緒に暮らしている者全員であると認識されていた。血のつながらなくとも、住み込みの書生や使用人などをも家族同様に見なしていたのである。だが、最近は「家族ペットの誕生」、「ペットの家族化」と言われるように（山田　2004）、血のつながらないどころか、人間でないペットをも家族と見なすという意識が中高生の間でも定着しているといえよう。

「ペットの家族化」を論じた家族社会学者の山田昌弘はまた、「主観的家族論」という概念を展開している。伝統的家族社会学では、「血縁、もしくは法的に継続した性関係に基づき生活を共同としている関係や集団」と定義しているが、今日においては家族を成り立たせてきた「血縁の共同」、「法的に基づいた性関係」という根拠が揺らいでおり、「家族とは客観的に定義できるものではない」（山田　2004：　34）。ゆえに、「自分が家族だと思う範囲が家族である」という「主観的家族論」を打ち出し、個々人が主観的に誰を家族と考えているのかを考察していくという手法から、家族をとらえなおそうとしたのである（山田　2004：　35）。

[1] 犬以外では、猫、鳥や魚、カメレオンなどが挙げられている。その他、ペット以外では、親族、友達、母の友達、施設の子、留学生などが挙げられている。

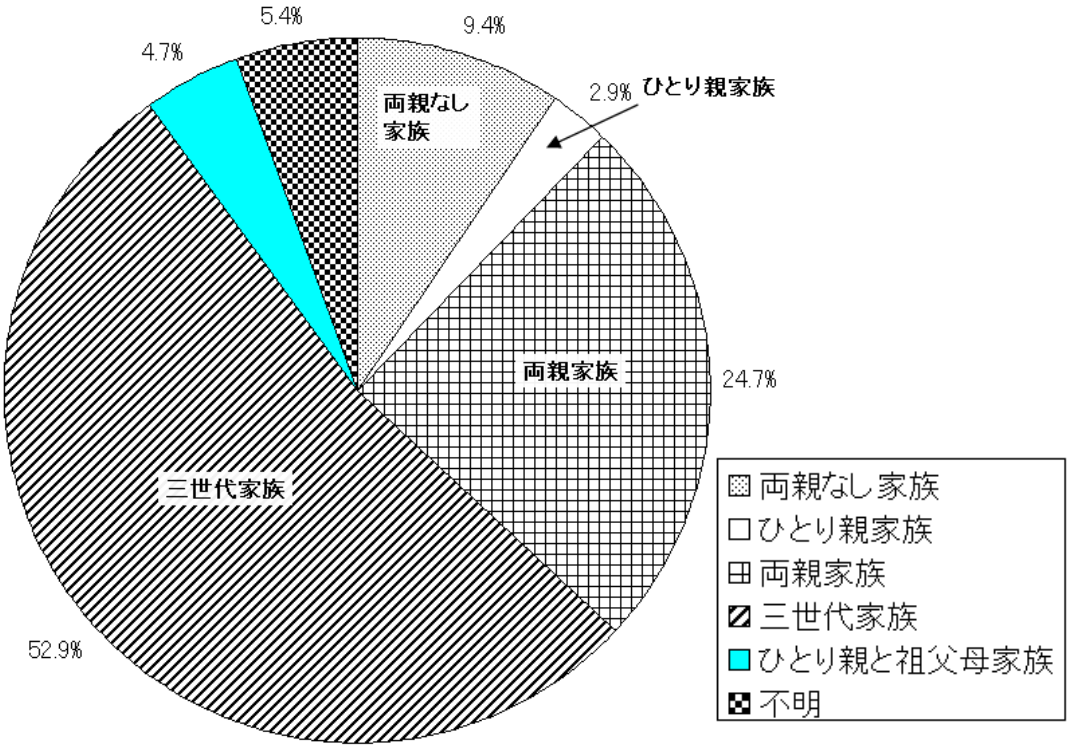
(3) 家族認識

それでは、今日の中高生は、主観的に誰を家族と認識しているのだろうか。言い換えれば、今日の中高生は、同居している、同居していないにかかわらず、家族をどの範囲までを自分の家族と認識しているのであろうか。

今回の調査では、図 3 に示されるように、「三世代家族」と見なしている生徒が 52.9%（1,353 人）、「両親家族」すなわち両親と自分またはきょうだいの家族と見なしている生徒が 24.7%（631 人）である。

一方、「両親なし家族」と見なしている生者が 9.4%（241 人）、「ひとり親と祖父母の家族」と見なしている者が 4.7%（120 人）、「ひとり親家族」と見なしている生徒が 2.9%（74 人）である。このように、世帯類型と家族認識を比較すると、中高生にとって、同居家族と「主観的家族」が異なることがわかる。

図 3　中高生の家族認識



さらに、世帯類型と家族認識をクロスさせると、表 2 のようになる。

表 2　世帯類型と家族認識とのクロス表

		家族認識					
		両親なし家族	ひとり親家族	両親家族	三世代家族	ひとり親と祖父母家族	合計
世帯類型	両親なし世帯	**5**	1	3	7	2	18
		27.8%	5.6%	16.7%	38.9%	11.1%	100.0%
	ひとり親世帯	17	**48**	38	76	58	237
		7.2%	**20.3%**	16.0%	32.1%	24.5%	100.0%
	両親世帯	148	16	**547**	797	10	1518
		9.7%	1.1%	**36.0%**	52.5%	.7%	100.0%
	三世代世帯	65	3	33	**433**	6	540
		12.0%	.6%	6.1%	**80.2%**	1.1%	100.0%
	ひとり親と祖父母世帯	3	4	3	33	**44**	87
		3.4%	4.6%	3.4%	37.9%	**50.6%**	100.0%
合計		238	72	624	1346	120	2400
		9.9%	3.0%	26.0%	56.1%	5.0%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　1153.447　df=16　p<.001　***

太字の箇所が世帯類型と家族認識が同じ生徒の割合を示しているが、「三世代世帯」、「ひとり親と祖父母世帯」の半分以下、「両親なし世帯」「ひとり親世帯」「両親世帯」の半分以上が世帯類型と家族認識が一致していない。つまり、同居家族と「主観的家族」が一致していないということがわかる。

「両親なし世帯」の 16.7%（3 人）が「両親家族」と認識し、38.9（7 人）が「三世代家族」と認識し、11.1%(2 人)が「ひとり親と祖父母家族」と認識している。また、「ひとり親世帯」の 16.0%（38 人）が「両親家族」と認識し、32.1%（76 人）が「三世代家族」と認識し、24.5%（58 人）が「ひとり親と祖父母家族」と認識している。さらに、「両親世帯」の 52.5%（797 人）が三世代家族と認識している。

反対に、「ひとり親世帯」の 7.2%（17 人）が「両親なし家族」と認識している。「両親世帯」の 9.7%（148 人）が「両親なし世帯」と認識し、1.1%(16 人)が「ひとり親家族」と認識している。また、「三世代世帯」の 12.0%（65 人）が「両親なし家族」と認識し、0.6%（3 人）が「ひとり親家族」と認識し、6.1%（33 人）が「両親家族」と認識している。「ひとり親と祖父母世帯」の 3.4%（3 人）が「両親なし家族」と認識し、4.6%（4 人）が「ひとり親家族」と認識している。

このように、同居していない人をも含めて家族とみなす生徒が多数いるとともに、同居している人を家族とみなしていない生徒も実数にして少なからず存在するのである。

それでは、どのような要因が、家族認識とかかわっているのだろうか。ここでは、家族との家族認識と会話時間の関係を見てみたい。世帯類型における両親世帯のみのデータを取り出し、父親、母親、きょうだい、祖父母との会話時間と家族認識をクロスさせてみた。

表 3　父親との会話時間と家族認識とのクロス表

		家族認識					
		両親なし家族	ひとり親家族	両親家族	三世代家族	ひとり親と祖父母家族	合計
父親との会話時間	ほとんどない	34	15	125	122	4	300
		11.3%	5.0%	41.7%	40.7%	1.3%	100.0%
	15分未満	46	0	166	181	2	395
		11.6%	.0%	42.0%	45.8%	.5%	100.0%
	15分～30分未満	23	0	107	167	2	299
		7.7%	.0%	35.8%	55.9%	.7%	100.0%
	30分～1時間未満	24	0	72	171	2	269
		8.9%	.0%	26.8%	63.6%	.7%	100.0%
	1時間～2時間未満	15	0	42	86	0	143
		10.5%	.0%	29.4%	60.1%	.0%	100.0%
	2時間以上	5	0	29	67	0	101
		5.0%	.0%	28.7%	66.3%	.0%	100.0%
合計		147	15	541	794	10	1507
		9.8%	1.0%	35.9%	52.7%	.7%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　110.113　df=20　p＜0．001　***

表 3 に示すように、父親との会話時間が「ほとんどない」の生徒においても、4 割は「両親家族」と認識し、4 割は「三世代家族」と認識している。そして、父親との会話時間が長くなるほど、「両親家族」と認識する割合が減少するとともに、「三世代家族」と認識する割合が増加する。すなわち、父親との会話時間が長くなるほど、両親世帯の生徒は、「両親家族」というよりもむしろ「三世代家族」と認識する傾向にあることがうかがえる。

また、父親との会話時間が「ほとんどない」の生徒は 1 割強が「両親なし家族」と認識し、5%が「ひとり親家族」と認識している。「15 分未満」の生徒も 1 割強が「両親なし家族」と　認識している。すなわち、父親との会話時間が短いほど、両親世帯の生徒は、「両親なし家族」、「ひとり親家族」と認識する傾向にあることがうかがえる。

表 4　母親との会話時間と家族認識とのクロス表

		家族認識					
		両親なし家族	ひとり親家族	両親家族	三世代家族	ひとり親と祖父母家族	合計
母親との会話時間	ほとんどない	9	2	26	26	1	64
		14.1%	3.1%	40.6%	40.6%	1.6%	100.0%
	15分未満	27	2	97	92	3	221
		12.2%	.9%	43.9%	41.6%	1.4%	100.0%
	15分～30分未満	24	2	121	170	1	318
		7.5%	.6%	38.1%	53.5%	.3%	100.0%
	30分～1時間未満	32	3	137	204	1	377
		8.5%	.8%	36.3%	54.1%	.3%	100.0%
	1時間～2時間未満	29	3	88	142	3	265
		10.9%	1.1%	33.2%	53.6%	1.1%	100.0%
	2時間以上	26	3	75	161	1	266
		9.8%	1.1%	28.2%	60.5%	.4%	100.0%
合計		147	15	544	795	10	1511
		9.7%	1.0%	36.0%	52.6%	.7%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　33.801　df=20　p=.028　**

表 4 に示すように、母親との会話時間と家族認識との関係も同様の傾向にある。母親との会話時間が長くなるほど、両親世帯の生徒は「両親家族」と認識する割合が減少するとともに、「三世代家族」と認識する割合が増加する。ただし、父親との会話時間が長い生徒のほうが、母親との会話時間が長い生徒よりも、「三世代家族」と認識する割合がやや高くなることが見いだされる。

また、母親との会話時間が「ほとんどない」の生徒は 14.1%が「両親なし家族」と認識し、3.1%が「ひとり親家族」と認識している。「15 分未満」の生徒も 12.2%が「両親なし家族」と認識している。母親との会話時間が短いほど、両親世帯の生徒は、「両親なし家族」、「ひとり親家族」と認識する傾向にあることがうかがえる。

表 5　きょうだいとの会話時間と家族認識とのクロス表

		家族認識					
		両親なし家族	ひとり親家族	両親家族	三世代家族	ひとり親と祖父母家族	合計
きょうだいとの会話時間	ほとんどない	28	3	107	141	4	283
		9.9%	1.1%	37.8%	49.8%	1.4%	100.0%
	15分未満	23	4	90	104	0	221
		10.4%	1.8%	40.7%	47.1%	.0%	100.0%
	15分～30分未満	18	4	87	102	2	213
		8.5%	1.9%	40.8%	47.9%	.9%	100.0%
	30分～1時間未満	22	1	94	169	1	287
		7.7%	.3%	32.8%	58.9%	.3%	100.0%
	1時間～2時間未満	19	2	67	103	0	191
		9.9%	1.0%	35.1%	53.9%	.0%	100.0%
	2時間以上	30	2	63	130	2	227
		13.2%	.9%	27.8%	57.3%	.9%	100.0%
合計		140	16	508	749	9	1422
		9.8%	1.1%	35.7%	52.7%	.6%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　28.385　df=20　p＝.101

表 5 に示すように、きょうだいとの会話時間と家族認識にはそれほどの関連性は見られなかった。だが、表 6 に示すように、祖父母との会話時間が長くなるほど、両親世帯の生徒は「両親家族」と認識する割合が低くなるとともに、「三世代家族」と認識する割合が高くなる傾向にある。

表 6　祖父母との会話時間と家族認識とのクロス表

		家族認識					
		両親なし家族	ひとり親家族	両親家族	三世代家族	ひとり親と祖父母家族	合計
祖父母との会話時間	ほとんどない	91	14	406	503	8	1022
		8.9%	1.4%	39.7%	49.2%	.8%	100.0%
	15分未満	21	0	32	105	1	159
		13.2%	.0%	20.1%	66.0%	.6%	100.0%
	15分～30分未満	12	0	21	68	0	101
		11.9%	.0%	20.8%	67.3%	.0%	100.0%
	30分～1時間未満	8	0	11	40	0	59
		13.6%	.0%	18.6%	67.8%	.0%	100.0%
	1時間～2時間未満	5	0	9	29	1	44
		11.4%	.0%	20.5%	65.9%	2.3%	100.0%
	2時間以上	3	0	2	18	0	23
		13.0%	.0%	8.7%	78.3%	.0%	100.0%
合計		140	14	481	763	10	1408
		9.9%	1.0%	34.2%	54.2%	.7%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　64.723　df=20　p＜.001　***

以上から、両親世帯の生徒において、両親との会話時間および祖父母との会話時間が長い生徒ほど、「三世代家族」と認識する割合が高くなること、両親との会話時間が短い生徒ほど、「両親なし家族」、「ひとり親家族」と認識する割合が高くなることが見いだされた。家族との会話時間は「主観的家族」の規模に影響を及ぼす要因の一つであることがうかがえる。

2. 家族の存在

山田昌弘は、家族には生活上の欲求を満足させてくれる存在としての家族と、かけがえのない存在としての家族という側面という二つの側面があり、個人が家族に対して期待するものは大きく「生活上の期待」と「感情的期待」の二つの種類があると述べている（山田　2005：　34）。

中高生にとっての家族の存在について考察するために、「あなたにとって家族はどんな存在ですか」という質問に対して、それぞれの項目について「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の 4 つの選択肢を設けた。

図 4　家族の存在

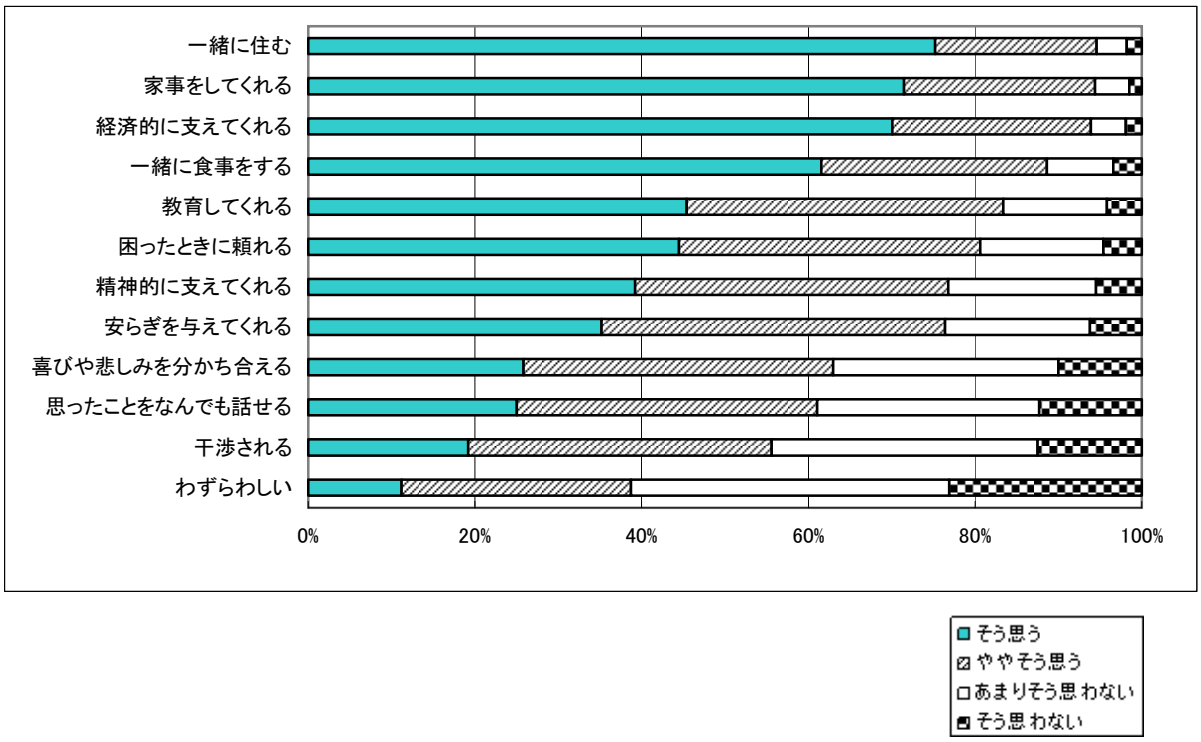


図 4 に示すように、「一緒に住む」、「家事をしてくれる」、「経済的に支えてくれる」、「一緒に食事をする」、「教育してくれる」、「困ったときに頼れる」は山田のいう家族に対する期待のうち、「生活上の期待」にあてはまるといえるが、これらの 6 つの項目に対しては「そう思う」と答えた生徒の割合がもっとも多く、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると、いずれも 8 割を超えている。

また、「精神的に支えてくれる」、「安らぎを与えてくれる」、「喜びや悲しみを分かち合える」、「思ったことを何でも話せる」は山田のいう「感情的期待」にあてはまるといえるが、これらの 4 つの項目に対しては「そう思う」と答えた生徒の割合が 4 割を下回り、先の 6 項目よりも低い。また、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると、家族を「精神的に支えてくれる」、「安らぎを与えてくれる」、「喜びや悲しみを分かち合える」、「思ったことを何でも話せる」と思っている生徒は 6 割以上 8 割未満となり、先の 6 項目よりもやや低い割合となっている。中高生の家族に対する「感情的期待」は「生活上の期待」ほど高くないということがうかがえる。

ただし、このような傾向は中高生に限らない。柏木恵子と永久ひさ子は、既婚女性を対象としたインタビュー調査の結果から、「家族の絆」の機能とは「生きるための道具的支え」、「経済的支え」、「責任・保護」、「家族の歴史の共有」とそれらから生じる「安心感」であるが、「情緒的支え」は必ずしも家族ならではの「支え」ではなく、友人からも多くを受けていると述べている(1996： 113-115)。換言するならば、山田のいう「生活上の期待」は家族に向けられるが、「感情的期待」は必ずしも家族に限らず、友人にも向けられるということであろう。

では、中高生は家族を「干渉される」、「わずらわしい」存在と思っているのだろうか。図 4 に示すように、「干渉される」については「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて 54.4%で過半数をわずかに超えているものの、「わずらわしい」にいたっては、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて 37.8%に止まっている。

2001 年に財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所が兵庫県在住の 30 歳以上 70 歳未満の有配偶男女に対して行った「家族のきずなに関する調査研究」では、「回答者の 9 割の人は全体的には家族こそ喜びや悲しみを分かちあえる関係と思いながらも、3 割強の人がその関係はわずらわしいと思っていること」を明らかにしている。そして、「家族は一方では私たちに喜びや悲しみを分かち合えるような、全人格的な関わりを提供し、他方では、それがゆえに家族は、ときに私たちを束縛し、その人間関係をわずらわしく感じさせていることもある」と述べている（財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所 2002： 16）。

調査時期がやや異なるものの、二つの調査結果を合わせると、中高生のほうが、中高生の親世代、祖父母世代よりも、家族を「精神的に支えてくれる」、「安らぎを与えてくれる」、「喜びや悲しみを分かち合える」、「思ったことを何でも話せる」存在と思っている者の割合が低く、「干渉される」、「わずらわしい」存在と思っている割合が高いことが指摘できる。

また、財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題所による調査研究では、家族に関する感じ方は、年齢や性別によっても異なった特徴をもっているとして、「年配の人のほうが若い人より、『家族こそが喜びや悲しみを分かち合える関係である』と考え、女性のほうが男性よりも、「家族の人間関係は煩わしいものである」と思っている」ことを明らかにしている。

では、中高生においてはどうであろうか。「喜びや悲しみを分かち合える」について見ると、学年別では明らかな傾向は見いだされなかったが、中高別、性別では差が見られた。まず、表 7-1 に示すように、中高別に見ると、「そう思う」、「ややそう思う」と肯定する生

徒は中学生が 68%、高校生が 59.5%となっており、中学生のほうが高校生よりも家族を「喜びや悲しみを分かち合える」存在であると思う生徒が多い。

表 7-1　中高別と家族の存在「喜びや悲しみを分かち合える」とのクロス表

		家族の存在　喜びや悲しみを分かち合える				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
	中学生	347	377	244	97	1065
		32.6%	35.4%	22.9%	9.1%	100.0%
	高校生	301	553	430	152	1436
		21.0%	38.5%	29.9%	10.6%	100.0%
合計		648	930	674	249	2501
		25.9%	37.2%	26.9%	10.0%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　46.029　df=3　p<.001　***

また、表 7-2 に示すように、性別で見ると、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると、「喜びや悲しみを分かち合える」存在と思う生徒は、男子が 61%、女子が 68.2%となっており、女子のほうが男子よりも家族を「喜びや悲しみを分かち合える」存在であると思う生徒が多い。

表 7-2　性別と家族の存在「喜びや悲しみを分かち合える」とのクロス表

		家族の存在　喜びや悲しみを分かち合える				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
	男性	422	677	502	199	1800
		23.4%	37.6%	27.9%	11.1%	100.0%
	女性	224	252	171	51	698
		32.1%	36.1%	24.5%	7.3%	100.0%
合計		646	929	673	250	2498
		25.9%	37.2%	26.9%	10.0%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　24.060　df=3　p<.001　***

次に、家族を「わずらわしい」存在という意見を肯定する生徒は中高別、学年別には差が見いだされなかったが、性別に差が見いだされた。表 7-3 に示すように、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると、家族を「わずらわしい」存在であると肯定する生徒は男子が 40.5%、女子が 33%となっており、男子のほうが女子よりも家族を「わずらわしい」存在であると思う生徒が多い。

表 7-3　性別と家族の存在「わずらわしい」とのクロス表

		家族の存在　わずらわしい				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
	男性	214	509	696	366	1785
		12.0%	28.5%	39.0%	20.5%	100.0%
	女性	56	169	251	205	681
		8.2%	24.8%	36.9%	30.1%	100.0%
合計		270	678	947	571	2466
		10.9%	27.5%	38.4%	23.2%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　29.036　df=3　p＜.001　***

以上のデータから、女子のほうが男子よりも、家族を「喜びや悲しみを分かち合える」存在であると思っており、男子のほうが女子よりも、家族を「わずらわしい」存在と思っていることがうかがえる。

そして、「喜びや悲しみを分かち合える」と「わずらわしい」とをクロスさせると、表 7-4 に示すように、家族を「喜びや悲しみを分かち合える」存在であると思っている生徒ほど、家族を「わずらわしい」存在であると思っていないことがわかる。いいかえれば、家族を「喜びや悲しみを分かち合える」存在であると思っていない生徒ほど、家族を「わずらわしい」存在であると思っていることがうかがえる。ただし、家族を「喜びや悲しみを分かち合える」存在であるかという問いに対して「そう思う」と答えている生徒の 2 割弱は、同時に家族を「わずらわしい」存在だと思っている。

表 7-4　家族の存在「喜びや悲しみを分かち合える」と「わずらわしい」とのクロス表

		家族の存在　わずらわしい				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
家族の存在:喜びや悲しみを分かち合える	そう思う	112	74	185	266	637
		17.6%	11.6%	29.0%	41.8%	100.0%
	ややそう思う	38	327	377	184	926
		4.1%	35.3%	40.7%	19.9%	100.0%
	あまりそう思わない	55	218	328	76	677
		8.1%	32.2%	48.4%	11.2%	100.0%
	そう思わない	73	67	61	48	249
		29.3%	26.9%	24.5%	19.3%	100.0%
合計		278	686	951	574	2489
		11.2%	27.6%	38.2%	23.1%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　417.836　df=9　p＜.001　***

いわゆる思春期には、第二次性徴が発達しはじめ、子どもから大人の身体に変化するとともに精神的にも「自我」の目覚めや反抗期を迎える。これらは自立していく過程の大切

なステップであり、この時期に親との距離を置こうとするのはむしろ自然なことであるといえよう。むしろ、今日の中高生は、5 割強の生徒が「干渉される」存在と思い、4 割の生徒が「わずらわしい」存在と思いながらも、同時にそれを超える 6 割から 8 割の生徒が家族を「喜びや悲しみを分かち合える」かけがえのない存在と思い、8 割以上の生徒が生活上の欲求を満足させてくれる存在と思っていると考えるほうが妥当であろう。

3. 家族との関係性

(1) 家族との共有行動

ここでは、家族との関係性を家族との共有行動と信頼関係とに分けて考察したい。ただし、家族のなかの主な人間関係である「夫婦」と「親子」のうち、中高生にとっては「親子」関係しかないことから、ここでは主に親との共有行動、信頼関係について考察する。共有行動の指標としては食事頻度と会話時間を用いた。

①親との食事頻度

表 8 に示すように、朝食は「ほぼ毎日」と答えた生徒が 43.8%、「週に 1～3 回程度」と答えた生徒が 16.0%、「月に 1～3 回程度」と答えた生徒が 10.7%、「年に数回以下」と答えた生徒が 17.4%、「そもそも食べない」と答えた生徒が 11.5%であった。また、夕食は朝食より親と食べている頻度が高い。「ほぼ毎日」と答えた生徒が 66.7%、「週に 1～2 回程度」と答えた生徒が 21.3%、「月に 1～3 回程度」と答えた生徒が 5.5%、「年に数回以下」と答えた生徒が 2.6%、「そもそも食べない」と答えた生徒が 1.7%であった。

表 8　親との食事頻度　　上段：%、下段：実数

	ほぼ毎日	週に1～3回程度	月に1～3回程度	年に数回以下	そもそも食べない	不明	合計
朝食	43.8	16.0	10.7	17.4	11.5	0.6	100.0
	1,120	409	274	445	295	15	2,558
夕食	66.7	21.3	5.5	2.6	1.7	2.2	100.0
	1,706	545	141	66	44	56	2,558

文部科学省が平成 20 年度に行った調査では、中学生（3 年生）が朝食を毎日食べる割合は、「している」が 81.2%、「どちらかといえばしている」が 10.8%、「あまりしていない」が 5.7%、「全くしていない」が 2.3%となっており、朝食を毎日食べる生徒の割合に年々増加傾向が見える（文部科学省・国立教育政策研究所『平成 20 年度全国学力・学習状況調査報告書』）。

本調査結果において、中学 3 年生のデータだけを取り出した場合、親との朝食頻度は「ほ

ぼ毎日」が 50.9%、「週に 1～3 回程度」が 14.7%、「そもそも食べない」が 12.3%であった。

二つの調査結果を合わせると、毎日朝食は食べる生徒でも、必ずしも親と一緒に食べるわけではないということがうかがえる。親とは住んでいない生徒、親と住んでいながらも親とは食べない生徒、あるいはいわゆる「孤食」と言われるような一人で食べる生徒が含まれていると考えられる。

次に、性別、中高別に親との食事頻度を見てみたい。

表 9-1　性別、中高別と親との朝食頻度とのクロス表

			親との朝食頻度					
			ほぼ毎日	週に1～3回程度	月に1～3回程度	年に数回以下	そもそも食べない	合計
男子		中学生	372	136	78	101	65	752
			49.5%	18.1%	10.4%	13.4%	8.6%	100.0%
		高校生	414	152	123	221	140	1050
			39.4%	14.5%	11.7%	21.0%	13.3%	100.0%
	合計		786	288	201	322	205	1802
			43.6%	16.0%	11.2%	17.9%	11.4%	100.0%
女子		中学生	169	56	26	37	27	315
			53.7%	17.8%	8.3%	11.7%	8.6%	100.0%
		高校生	144	59	44	80	59	386
			37.3%	15.3%	11.4%	20.7%	15.3%	100.0%
	合計		313	115	70	117	86	701
			44.7%	16.4%	10.0%	16.7%	12.3%	100.0%

注:男子のPearsonのカイ二乗値　37.101　df=4　p＜.001　***
　女子のPearsonのカイ二乗値　27.505　df=4　p＜.001　***

表 9-2　性別、中高別と親との夕食頻度とのクロス表

			親との夕食頻度					
			ほぼ毎日	週に1～3回程度	月に1～3回程度	年に数回以下	そもそも食べない	合計
男子		中学生	527	148	42	12	5	734
			71.8%	20.2%	5.7%	1.6%	.7%	100.0%
		高校生	647	273	60	32	21	1033
			62.6%	26.4%	5.8%	3.1%	2.0%	100.0%
	合計		1174	421	102	44	26	1767
			66.4%	23.8%	5.8%	2.5%	1.5%	100.0%
女子		中学生	250	38	11	7	4	310
			80.6%	12.3%	3.5%	2.3%	1.3%	100.0%
		高校生	253	82	25	12	13	385
			65.7%	21.3%	6.5%	3.1%	3.4%	100.0%
	合計		503	120	36	19	17	695
			72.4%	17.3%	5.2%	2.7%	2.4%	100.0%

注:男子のPearsonのカイ二乗値　21.515　df=4　p<.001　***
　女子のPearsonのカイ二乗値　19.813　df=4　p=.001　**

表 9-1、表 9-2 に示すように、男女いずれも、朝食、夕食ともに、中学生のほうが高校生よりも親とともに食べている生徒の割合が高い。また、朝食、夕食ともに、女子のほうが男子よりも、親と「ほぼ毎日」食べている生徒の割合が高い。唯一、高校生の女子の朝食のみ、親と「ほぼ毎日」ともに食べる割合が、男子よりもやや低い。

②家族との会話時間

次に、家族および家族以外の人との会話時間を見てみたい。

表 10　家族、家族以外との会話時間　　上段：%、下段：人数

	ほとんどない	15分未満	15分～30分未満	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間以上	不明	合計
父親と	710	597	426	390	205	142	88	100.0
	27.8	23.3	16.7	15.2	8.0	5.6	3.5	2,558
母親と	166	383	527	585	433	423	41	100.0
	6.5	15.0	20.6	22.9	16.9	16.5	1.6	2,558
きょうだいと	530	384	366	451	315	354	158	100.0
	20.7	15.0	14.3	17.6	12.3	13.8	6.2	2,558
祖父母と	1429	368	248	167	116	73	157	100.0
	55.9	14.4	9.7	6.5	4.5	2.9	6.1	2,558
上記以外の家族と	1834	187	119	75	56	65	8.7	100.0
	71.7	7.3	4.7	2.9	2.2	2.5	222	2,558
友達と	90	86	110	309	492	1388	3.2	100.0
	3.5	3.4	4.3	12.1	19.2	54.3	83	2,558
近所の人と	1863	387	95	35	14	25	5.4	100.0
	72.8	15.1	3.7	1.4	0.5	1.0	139	2,558

父親との 1 日平均会話時間は、「ほとんどない」がもっとも多く、次いで「15 分未満」が多く、これらを合わせると、「15 分未満」の生徒が過半数を占める。反対に、「2 時間以

上」と答えた生徒は 5.6%（142 人）である。

一方、母親との 1 日平均会話時間は、「30 分～1 時間未満」がもっとも多く、次は「15 分～30 分未満」となり、「2 時間以上」は 16.5%である。全体的に、母親とのほうが父親より、会話時間が長いということがわかる。

きょうだいとの 1 日平均会話時間は、「ほとんどない」がもっとも多く、次いで「15 分未満」、「15 分～30 分未満」の順となり、これらの割合を合計すると、「30 分未満」の生徒が 5 割を占めている。

祖父母との 1 日平均会話時間は、「ほとんどない」が過半数を占め、次いで「15 分未満」、「15 分～30 分未満」の順となっている。これらの割合を合計すると、祖父母との 1 日平均会話時間は「30 分未満」の生徒が 8 割を占めている。

また、その他の家族、近所の人との 1 日平均会話時間はいずれも「ほとんどない」が約 7 割を占めている。

反対に、友達との 1 日平均会話時間は、「2 時間以上」が最も多く、54.3%（1,388 人）を占め、次いで「1 時間～2 時間未満」が 19.2%（492 人）となっている。

以上から、中高生にとって会話時間が長い対象は、順に友達、母親、きょうだい、父親、祖父母、上記以外の家族、近所の人となる。

それでは、父親、母親との会話時間と性別、学年とをクロスさせてさらに詳しくみてみたい。

父親との会話時間については、表 11-1 に示すように、性別によってそれほど差が見られないが、男女ともに学年が上がるごとに短くなる傾向がある。そして、男女いずれも中学 3 年生以降「ほとんどない」とする生徒がもっとも多くなるとともにその割合が増加していき、男女いずれも学年が上がるごとに「2 時間以上」とする生徒の割合が減少していく。

表 11-1　学年、性別と父親との会話時間とのクロス表

	N	ほとんどない	15分未満	15分～30分未満	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間以上
男子	1759	27.1	25.2	17.9	16.4	7.8	5.6
中学1年	253	17.0	23.7	20.9	20.9	8.3	9.1
中学2年	260	23.8	24.2	16.5	17.7	10.0	7.7
中学3年	219	24.7	24.7	16.0	21.9	6.4	6.4
高校1年	317	28.7	26.2	18.9	12.6	8.2	5.4
高校2年	388	32.0	26.8	17.8	15.2	5.7	2.6
高校3年	322	32.0	24.5	17.1	13.0	9.0	4.3
女子	674	31.6	22.0	16.0	14.4	9.8	6.2
中学1年	92	30.4	19.6	13.0	15.2	9.8	12.0
中学2年	109	21.1	14.7	25.7	18.3	11.9	8.3
中学3年	101	30.7	28.7	17.8	13.9	3.0	5.9
高校1年	128	30.5	26.6	17.2	10.9	9.4	5.5
高校2年	169	36.7	22.5	9.5	14.8	12.4	4.1
高校3年	75	40.0	17.3	16.0	13.3	10.7	2.7

注：男子のｶｲ二乗値＝53.916　df＝25　p＝.001　**
　　女子のｶｲ二乗値＝43.020　df＝25　p＝.014　＊

一方、母親との会話時間については、表 11-2 に示すように、性別によって差がみられる。

女子のほうが男子よりも長い傾向にある。

また、男子は学年が上がるごとに短くなるが、女子は学年が上がるごとに長くなる傾向がある。男女ともに中学生は「30 分～1 時間」とする生徒がもっとも多いが、男子は高校 1 年生以降「15 分～30 分未満」とする生徒がもっとも多くなり、女子は反対に高校 1 年生では「1 時間～2 時間未満」とする生徒がもっとも多く、高校 2 年生以降は「2 時間以上」とする生徒がもっとも多くなっている。

表 11-2　学年、性別と母親との会話時間とのクロス表

	N	ほとんどない	15分未満	15分～30分未満	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間以上
男子	1789	7.2	17.4	22.6	23.6	15.4	13.6
中学1年	255	4.7	11.8	14.9	29.8	18.0	20.8
中学2年	265	8.3	17.7	15.8	23.0	18.5	16.6
中学3年	224	5.4	18.3	21.0	25.9	14.3	15.2
高校1年	322	7.1	17.1	28.6	19.3	16.1	11.8
高校2年	395	7.6	21.8	25.3	22.8	13.2	9.4
高校3年	328	9.1	16.2	26.2	23.2	13.7	11.6
女子	690	4.3	9.4	16.5	22.8	22.3	24.6
中学1年	95	4.2	8.4	11.6	24.2	17.9	33.7
中学2年	111	3.6	8.1	16.2	24.3	26.1	21.6
中学3年	102	4.9	12.7	16.7	26.5	20.6	18.6
高校1年	132	6.1	6.8	19.7	19.7	25.0	22.7
高校2年	171	5.3	7.6	17.0	22.2	21.6	26.3
高校3年	79	0.0	16.5	16.5	20.3	21.5	25.3

注：男子のｶｲ二乗値＝66.539　df＝25　p＜.001　***
　女子のｶｲ二乗値＝23.560　df＝25　p＝.545

では、友達との会話時間についても、性別、学年とをクロスさせてみておこう。表 11-3 に示すように、まず、性別によって差がみられる。女子のほうが男子よりも、友達との会話時間が長い傾向にある。

中高別によっても差が見られ、男女いずれも、高校生のほうが中学生よりも、友達との会話時間が長い傾向にある。学年別に詳しくみれば、男子は、中学生では学年が上がるごとに友達との会話時間が長くなるが、高校生では学年が上がるごとに短くなる。しかし、女子は、中学生、高校生ともに、2 年生でいったん下がり、3 年生がもっとも長くなる。

表 11-3　学年、性別と友達との会話時間とのクロス表

	N	ほとんどない	15分未満	15分～30分未満	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間以上
男子	1747	4.2	3.4	5.3	14.4	21.1	51.5
中学1年	253	4.7	4.0	8.7	17.8	22.1	42.7
中学2年	260	4.6	3.5	7.7	11.5	23.1	49.6
中学3年	220	1.8	2.7	5.9	12.3	23.2	54.1
高校1年	316	4.1	2.5	3.8	15.2	17.1	57.3
高校2年	386	4.1	3.9	4.4	13.2	19.2	55.2
高校3年	312	5.4	3.8	2.9	16.3	23.4	48.1
女子	691	1.6	3.3	2.3	7.8	17.4	67.6
中学1年	94	3.2	5.3	4.3	7.4	17.0	62.8
中学2年	111	1.8	1.8	3.6	8.1	27.0	57.7
中学3年	104	1.0	2.9	1.9	12.5	13.5	68.3
高校1年	129	1.6	5.4	0.0	4.7	17.1	71.3
高校2年	173	1.7	2.3	2.3	6.9	16.2	70.5
高校3年	80	0	2.5	2.5	8.75	12.5	73.8

注：男子のｶｲ二乗値＝38.303　df＝25　p＜O. 5　＊
　女子のｶｲ二乗値＝28.724　df＝25　p＝.275　＊

話題別の話し相手を見てみると、表 12 に示すように、「その日学校であったこと」、「友達のこと」、「勉強・進路のこと」、「人生にかかわる大きなこと」は母親に話すという生徒がもっとも多い。そのうち、前 3 項目は母親に次いで友達が多いが、「人生にかかわる大きなこと」は母親に次いで父親が多くなっている。「趣味、娯楽のこと」は友達がもっとも多く、次が母親となっている。

また、「恋愛のこと」、「歴史や時事問題」、「身体に関すること」は誰にも話さないとする生徒がもっとも多く、その次に話す相手として多かったのが、「恋愛のこと」は友達、「歴史や時事問題」は父親、「身体に関すること」は母親であった。唯一、母親より父親の割合が高いのは、「歴史や時事問題」であった。

表 12　話題別の話し相手　　上段：人数、下段：%

	父親	母親	きょうだい	祖父母	友達	近所の人	その他の人	誰にも話さない
その日学校であった事	428 16.7	1,536 60.0	457 17.9	132 5.2	845 33.0	20 0.8	77 3	342 13.4
友達の事	332 13.0	1,227 48.0	415 16.2	78 3	1,023 40	12 0.5	74 2.9	381 14.9
恋愛の事	51 2.0	153 6.0	160 6.3	17 0.7	1,086 42.5	9 0.4	100 3.9	1,176 46
勉強・進路の事	710 27.8	1375 54	211 8.2	108 4.2	739 28.9	15 0.6	147 5.7	414 16.2
趣味、娯楽の事	471 18.4	637 24.9	543 21.2	102 4.0	1,407 55	22 0.9	96 3.8	393 15.4
歴史や時事問題	532 20.8	511 20	175 6.8	126 4.9	361 14.1	9 0.4	98 3.8	1,158 45.3
身体に関する事	277 10.8	793 31.0	157 6.1	55 2.2	627 24.5	7 0.3	86 3.4	1,042 40.7
人生にかかわる大きな事	800 31.3	1,198 46.8	229 9	139 5.4	462 18.1	14 0.5	107 4.2	774 30.3

(2) 親との信頼関係

次に、親との信頼関係についてみていきたい。まず、親との信頼関係を測定するためのものさし（尺度）を作ることにする。アンケート調査票のなかの問 10 の質問項目を用いて、親との信頼関係因子を見出すために因子分析を行うことにした。因子分析とは多変量解析の一種で、データを要約するために用いる用法であり、変数間の相関関係から潜在的ないくつかの共通因子を抽出し、データ（変数群）を潜在因子に分解する方法である。

因子分析の方法としては、主因子法によりバリマックス回転を行い、表 9 のような結果を得た。

第 1 因子は、「N.　あなたは母親を信頼している」「I.　母親はあなたのことを信頼してくれている」「O.　あなたと母親は仲が良いほうである」「J.　母親はあなたの気持ちをわかってくれている」「K.　母親はあなたのことを愛してくれている」の 5 項目が高い因子負荷量を示しており、このことから、この因子を「母親に対する信頼感」因子と解釈する。第 2 因子は、「F.　あなたは父親を信頼している」「H.　あなたは父親と仲が良いほうである」「B.　父親はあなたの気持ちをわかってくれている」「A.　父親はあなたのことを信頼してくれている」「「C.　父親はあなたのことを愛してくれている」の 5 項目が高い因子負荷量を示していることから、「父親に対する信頼感」因子と解釈する。第 3 因子は、「M.　母親はあなたの行動や考え、友人関係に関心をもっていない」「E.　父親はあなたの行動や考え、友人関係に関心をもっていない」「D.　父親はあなたの行動や考え、友人関係に干渉しすぎる」「L.　母親はあなたの行動や考え、友人関係に干渉しすぎる」の 4 項目が高い因子負荷量を示していることから、「親の自分に対する不信感」因子とする。

次に、それぞれの因子に高い因子負荷量を占める項目を用いて、親との信頼関係を測定する尺度を構成する。そのために、各因子に高い因子負荷量を示す項目が一次元尺度を構

成するうえでふさわしいかどうか、すなわち項目相互の内的一貫性が高いかどうかを測定するために、クロンバッハの信頼性係数を求めた。その結果、第 1 因子は 0.926、第 2 因子は 0.925、第 3 因子は 0.627 となった。クロンバッハの信頼性係数は、経験的におおむね 0.7 以上が望ましい。今回の調査において、他の尺度を構成できないことから、今回はこの結果を用いて、親との信頼関係尺度を構成することをことわっておきたい。

親との信頼関係をはかる尺度として、「母親に対する信頼感」「父親に対する信頼感」「親の自分に対する不信感」の 3 種の尺度を構成する。具体的には、前 2 項目への回答において、親との信頼関係が高いほど、「そう思う」1 点、「ややそう思う」2 点、「あまりそう思わない」3 点、「そう思わない」4 点とし、後 1 項目への回答において、親との信頼関係が高いほど「そう思わない」1 点、「あまりそう思わない」2 点、「ややそう思う」3 点、「そう思う」1 点とした 4 件法の点数を加算し、その合計をひとりひとりの得点とする。親との信頼関係が高いほど、低い得点を示すことになる。

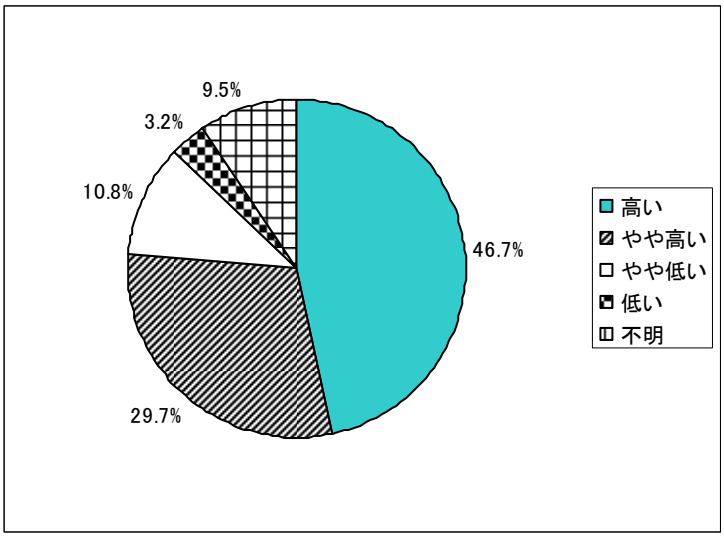
表 13　親との信頼関係に関する因子分析結果

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
あなたは母親を信頼している	**.831**	.302	.079
母親はあなたのことを信頼してくれている	**.786**	.354	.036
あなたと母親は仲が良いほうである	**.781**	.287	.065
母親はあなたの気持ちをわかってくれている	**.771**	.299	.009
母親はあなたのことを愛してくれている	**.743**	.402	.068
あなたは父親を信頼している	.334	**.803**	.088
あなたは父親と仲が良いほうである	.284	**.776**	.058
父親はあなたの気持ちをわかってくれている	.262	**.772**	.023
父親はあなたのことを信頼してくれている	.375	**.763**	.068
父親はあなたのことを愛してくれている	.389	**.759**	.066
母親はあなたの行動や考え、友人関係に関心をもっていない	.107	.004	**.668**
父親はあなたの行動や考え、友人関係に関心をもっていない	.061	.188	**.611**
父親はあなたの行動や考え、友人関係に干渉しすぎる	-.081	.002	**.489**
母親はあなたの行動や考え、友人関係に干渉しすぎる	.062	-.005	**.484**
寄与率	26.0	25.6	9.5
累積寄与率	26.0	51.6	61.2
クロンバッハの信頼性係数	.926	.925	.627
因子解釈	母親に対する信頼感	父親に対する信頼感	親の自分に対する不信感

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

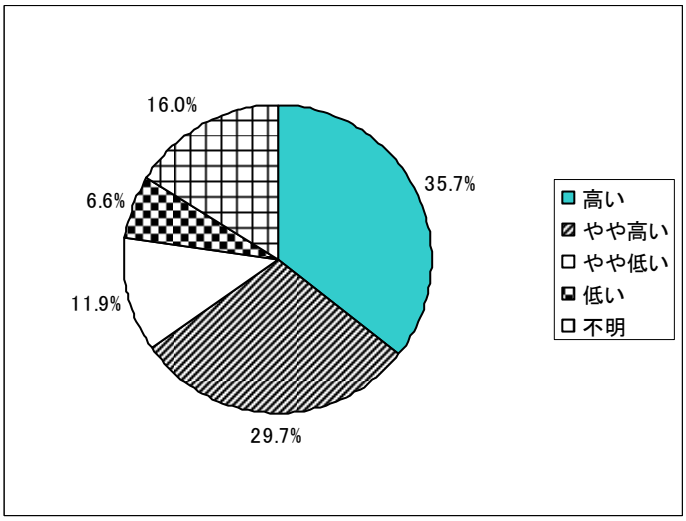
図 5-1、図 5-2、図 5-3 は親との信頼関係尺度を用いて、対象者全員の親との信頼関係の度合いを測定したものである。図 5-1 に示すように、母親に対する信頼感が高い生徒は 46.7%、やや高い生徒は 29.7%、やや低い生徒は 10.8%、低い生徒は 3.2%となっている。「高い」「やや高い」を合わせて、76.4%の生徒は母親に対する信頼感が高い。

図 5-1　母親に対する信頼感



一方、図 5-2 に示すように、父親に対する信頼感が高い生徒は 35.7%、やや高い生徒は 29.7%、やや低い生徒は 11.9%、低い生徒は 6.6%となっている。「高い」「やや高い」を合わせて、65.7%の生徒は父親に対する信頼感が高い。中高生にとって、母親に対する信頼感のほうが父親に対する信頼感よりも高いといえる。

図 5-2　父親に対する信頼感



また、図 5-3 に示すように、親の自分に対する不信感が「低い」と思っている生徒は 24.2%、「やや低い」と思っている生徒は 37.9%、「やや高い」と思っている生徒は 16.5%、「高い」と思っている生徒は 4.1%となっている。「低い」、「やや低い」を合わせて、62.1%の生徒は、親の自分に対する不信感が低いと思っている。いいかえれば、親は自分を信頼していると思っている生徒がおよそ 6 割であるといえよう。同時に、「やや高い」「高い」合わせると、2 割を超える。すなわち、親は自分を信頼していないと思っている生徒が 2 割強いるということであり、これは決して低い数値ではないといえる。

図 5-3　親の自分に対する不信感

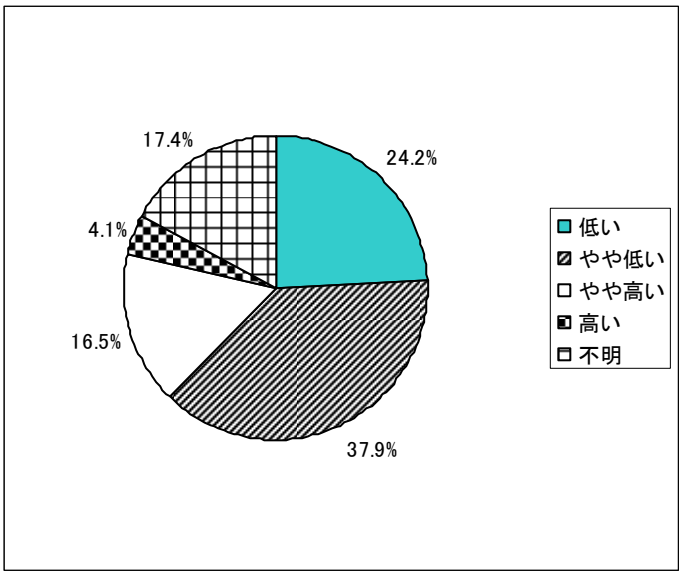


表 14-1 に示すように、母親に対する信頼感は性別によって差がみられた。女子のほうが男子よりも母親に対する信頼感が高い傾向にある。

表 14-1　性別と母親に対する信頼感とのクロス表

		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
	男子	778	584	214	65	1641
		47.4%	35.6%	13.0%	4.0%	100.0%
	女子	405	172	55	16	648
		62.5%	26.5%	8.5%	2.5%	100.0%
合計		1183	756	269	81	2289
		51.7%	33.0%	11.8%	3.5%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　43.092　df=3　p<.001　***

しかし、表 14-2 に示すように、父親に対する信頼感は性別によってそれほど差がみられなかった。

表 14-2　性別と父親に対する信頼感とのクロス表

		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
	男子	645	571	217	113	1546
		41.7%	36.9%	14.0%	7.3%	100.0%
	女子	260	181	82	54	577
		45.1%	31.4%	14.2%	9.4%	100.0%
合計		905	752	299	167	2123
		42.6%	35.4%	14.1%	7.9%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　7.026　df=3　P=.071

だが、表 14-3 に示すように、親の自分に対する不信感は性別によって差が見られた。女子のほうが男子よりも、親の自分に対する不信感が低いと思っている傾向がある。いいかえれば、女子のほうが男子よりも、親は自分を信頼していると思っている傾向にある。

表 14-3　性別と親の自分に対する不信感とのクロス表

		低い	やや低い	やや高い	高い	合計
	男子	411	690	321	87	1509
		27.2%	45.7%	21.3%	5.8%	100.0%
	女子	204	271	88	16	579
		35.2%	46.8%	15.2%	2.8%	100.0%
合計		615	961	409	103	2088
		29.5%	46.0%	19.6%	4.9%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　24.716　df=3　P<.001　***

母親に対する信頼感は中高別で差が見られた。表 15-1 に示すように、中学生のほうが高校生よりも、母親に対する信頼感が高い傾向にある。さらに詳しく学年別で見れば、中学生は 1 年生がもっとも高く、2 年生のときにいったん低くなり、3 年生のときにまた高くなるという特徴がみられる。高校生は 2 年生のときにいったん低くなり、3 年生のときにもっとも高くなるという特徴がみられる。

表 15-1　学年と母親に対する信頼感とのクロス表

		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
	中学1年	202	89	18	13	322
		62.7%	27.6%	5.6%	4.0%	100.0%
	中学2年	200	97	41	11	349
		57.3%	27.8%	11.7%	3.2%	100.0%
	中学3年	179	83	36	8	306
		58.5%	27.1%	11.8%	2.6%	100.0%
	高校1年	204	143	56	17	420
		48.6%	34.0%	13.3%	4.0%	100.0%
	高校2年	218	206	72	20	516
		42.2%	39.9%	14.0%	3.9%	100.0%
	高校3年	182	137	48	13	380
		47.9%	36.1%	12.6%	3.4%	100.0%
合計		1185	755	271	82	2293
		51.7%	32.9%	11.8%	3.6%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　56.000　df=15　p<.001　***

父親に対する信頼感も、母親に対する信頼感と同様、中高別で差が見られた。表 15-1 に示すように、中学生のほうが高校生よりも、父親に対する信頼感が高い傾向にある。さらに詳しく学年別で見れば、中学生は 1 年生がもっとも高く、2 年生のときにいったん低くなり、3 年生のときにまた高くなるという特徴がみられる。高校生は 2 年生のときにいったん低くなり、3 年生のときにもっとも高くなるという特徴がみられる。

表 15-2　学年と父親に対する信頼感とのクロス表

		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
	中学1年	152	107	27	12	298
		51.0%	35.9%	9.1%	4.0%	100.0%
	中学2年	148	117	33	26	324
		45.7%	36.1%	10.2%	8.0%	100.0%
	中学3年	136	85	40	25	286
		47.6%	29.7%	14.0%	8.7%	100.0%
	高校1年	157	142	54	33	386
		40.7%	36.8%	14.0%	8.5%	100.0%
	高校2年	170	157	101	43	471
		36.1%	33.3%	21.4%	9.1%	100.0%
	高校3年	142	143	45	28	358
		39.7%	39.9%	12.6%	7.8%	100.0%
合計		905	751	300	167	2123
		42.6%	35.4%	14.1%	7.9%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　53.089　df=15　p<.001　***

親の自分に対する不信感は、表 15-3 に示すように、中高別、学年別によってそれほど差が見られなかった。

表 15-3　学年と親の自分に対する不信感とのクロス表

		低い	やや低い	やや高い	高い	合計
	中学1年	98	123	48	17	286
		34.3%	43.0%	16.8%	5.9%	100.0%
	中学2年	96	135	60	18	309
		31.1%	43.7%	19.4%	5.8%	100.0%
	中学3年	93	113	60	17	283
		32.9%	39.9%	21.2%	6.0%	100.0%
	高校1年	100	190	74	21	385
		26.0%	49.4%	19.2%	5.5%	100.0%
	高校2年	119	230	104	17	470
		25.3%	48.9%	22.1%	3.6%	100.0%
	高校3年	109	169	65	13	356
		30.6%	47.5%	18.3%	3.7%	100.0%
合計		615	960	411	103	2089
		29.4%	46.0%	19.7%	4.9%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　21.496　df=15　p=.122

以上、本章では家族との関係性を共有行動――食事頻度、会話時間――と信頼関係とに分けて考察したが、いずれも都市部、非都市部の違い、あるいは居住地によって大きな差は見られなかった。

4. まとめ

本章で得られた知見を以下、整理しておきたい。

＜知見 1＞中高生にとって、同居家族と「主観的家族」は必ずしも一致しない。

＜知見 2＞家族との会話時間は「主観的家族」の規模に影響を及ぼす要因の一つである。

＜知見 3＞今日の中高生は家族を「干渉される存在」、「わずらわしい存在」と思いながらも、それを超える割合で「生活上の欲求を満足させてくれる存在」、「かけがえのない存在」と思っている。

＜知見 4＞中学生のほうが高校生よりも、女子のほうが男子よりも、家族を「喜びや悲しみを分かち合える」存在であると思っている傾向にある。

＜知見 5＞男子のほうが女子よりも、家族を「わずらわしい」存在であると思っている傾向にある。

＜知見 6＞「喜びや悲しみを分かち合える」存在であると思っている生徒ほど、家族を「わずらわしい」存在であるとは思っていない傾向にある。

＜知見 7＞朝食、夕食いずれも、親とともに食べている頻度は、中学生のほうが高校生よりも高く、女子のほうが男子よりも高い。

＜知見 8＞今日の中高生は、母親との会話時間のほうが父親との会話時間よりも長く、父親との会話時間は男女ともに学年が上がるごとに短くなるが、母親との会話時間は男子は学年が上がるごとに短くなり、女子は学年が上がるごとに長くなる傾向にある。

＜知見 9＞友達との会話時間は、全体的に父親、母親との会話時間よりも長く、女子のほうが男子よりも長い傾向にある。

＜知見 10＞友達との会話時間は、男女いずれも高校生のほうが中学生よりも長くなり、男子は、中学生は学年が上がるごとに長くなるが、高校生では学年が上がるごとに短くなり、女子は、中学生、高校生ともに 2 年生でいったん下がり、3 年生でもっとも長くなる。

＜知見 11＞父親に対する信頼感は性別によって差がみられないが、母親に対する信頼感は女子のほうが男子よりも高い傾向にある。

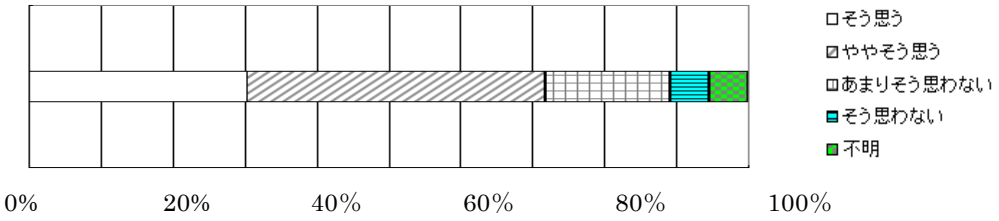
＜知見 12＞父親、母親に対する信頼感は、中学生のほうが高校生よりも高い傾向にある。

＜知見 13＞中高生と家族との関係性――共有行動の時間、信頼関係――は、居住地によって差はみられない。

第４章　家族の絆の強弱感

では、中高生たちは自分の家族の絆をどのようにみているのだろうか。「あなたは、ご自分の家族のきずなが強いと思いますか」という質問に対し、図６に示すように、32.1%の生徒は「そう思う」と答え、43.7%の生徒は「ややそう思う」と答えている。両者合わせて、75.8%の生徒が自分の家族の絆は強いと感じている。

図６　　家族の絆の強弱感



財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所の「家族のきずなに関する調査研究」（2002）では、同じ質問に対して、49.2%が「そう思う」、41.9%が「ややそう思う」と答え、両者合わせて91.1%の生徒が自分の家族の絆が強いと感じている（財団法人兵庫県ヒューマンケア研究機構・家庭問題研究所　2002：　17）。中高生のほうが、中高生の親世代､祖父母世代よりも､家族の絆が強いと感じている生徒が少ないことがわかる。

1. 属性と家族の絆の強弱感

それでは、家族の絆の強弱感と属性とをクロスさせてもう少し詳しくみていきたい。家族の絆の強弱感は、表16-1に示すように、性別では差がそれほど見られなかった。だが、表16-2に示すように、中高別では差が見られた。「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて、中学生のほうが高校生よりも､「家族の絆が強い」と思う生徒の割合が高いことがわかる。

表16-1　　性別と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
	男子	533	763	329	96	1721
		31.0%	44.3%	19.1%	5.6%	100.0%
	女子	240	287	112	40	679
		35.3%	42.3%	16.5%	5.9%	100.0%
合計		773	1050	441	136	2400
		32.2%	43.8%	18.4%	5.7%	100.0%

注:カイ二乗値　5.276　df=3　p=0.153

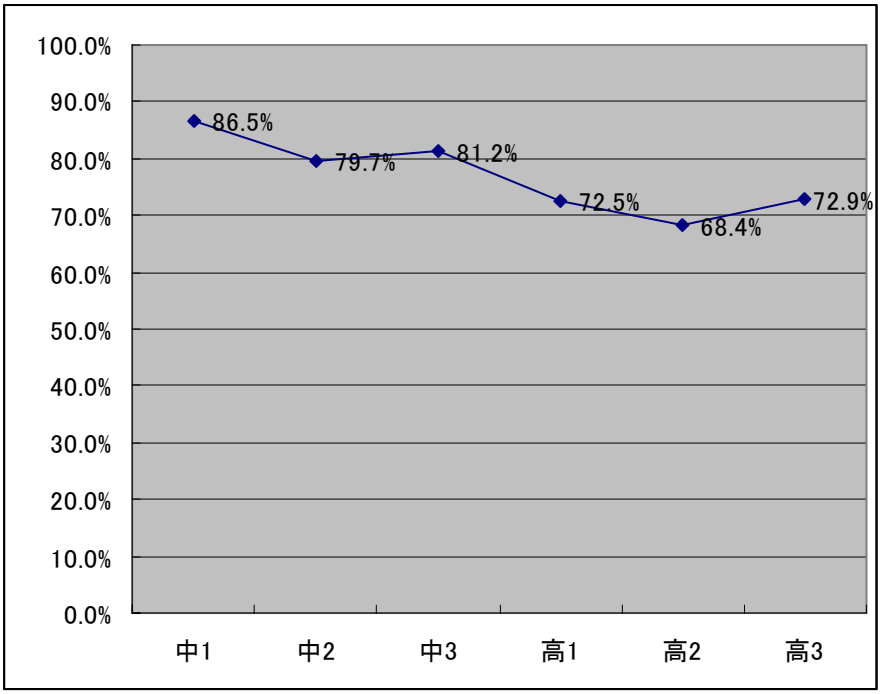
表 16-2　　中高別と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
	中学生	404	438	145	35	1022
		39.5%	42.9%	14.2%	3.4%	100.0%
	高校生	371	612	299	103	1385
		26.8%	44.2%	21.6%	7.4%	100.0%
合計		775	1050	444	138	2407
		32.2%	43.6%	18.4%	5.7%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　63.830　df=3　P<.001　***

学年別にみると、「あなたは、ご自分の家族のきずなが強いと思いますか」という質問に対し、「そう思う」、「ややそう思う」を合わせて肯定する生徒の割合は、図 7 に示すように、中学生、高校生いずれも、2 年生でいったん下がり、3 年生でやや上がるという特徴を持っている。

図 7　学年別　家族の絆が強いと思っている者の割合



また、表 16-3 に示すように、家族の絆の強弱感は居住地によっても差がみられる。「そう思う」「ややそう思う」の両者を合わせて、家族の絆が強いと思っている生徒の割合が高い居住地は丹波（83.4%）、東播磨(81%)、阪神北（79.8%）などである。反対に、「そう思う」「ややそう思う」の両者を合わせて、家族の絆が強いと思っている生徒の割合がもっとも低い居住地域は淡路（60.6%）であった。淡路は地域的な特色として、今日なお人と

の絆が家族内に限られず、近隣、地域の人などとの絆も強いからということも考えられる。

表 16-3　居住地域別　家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
	但馬	123	143	65	16	347
		35.4%	41.2%	18.7%	4.6%	100.0%
	丹波	1	4	1	0	6
		16.7%	66.7%	16.7%	.0%	100.0%
	阪神北	31	52	16	5	104
		29.8%	50.0%	15.4%	4.8%	100.0%
	阪神南	188	243	117	25	573
		32.8%	42.4%	20.4%	4.4%	100.0%
	神戸	154	193	86	32	465
		33.1%	41.5%	18.5%	6.9%	100.0%
	北播磨	1	3	1	1	6
		16.7%	50.0%	16.7%	16.7%	100.0%
	中播磨	10	19	9	2	40
		25.0%	47.5%	22.5%	5.0%	100.0%
	西播磨	96	140	58	21	315
		30.5%	44.4%	18.4%	6.7%	100.0%
	東播磨	103	153	47	13	316
		32.6%	48.4%	14.9%	4.1%	100.0%
	淡路	28	38	29	14	109
		25.7%	34.9%	26.6%	12.8%	100.0%
	大阪	14	17	1	1	33
		42.4%	51.5%	3.0%	3.0%	100.0%
合計		749	1005	430	130	2314
		32.4%	43.4%	18.6%	5.6%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　43.102　df=30　P＜.01 **

2. 家族との関係性と家族の絆の強弱感

(1) 家族との共有行動と家族の絆の強弱感

次に、家族との共有行動と家族の絆の強弱感との関連性について見てみたい。まず、親との食事頻度と家族の絆の強弱感について見てみたい。

表 17-1　親との朝食頻度と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
親との朝食頻度	ほぼ毎日	440	454	135	26	1055
		41.7%	43.0%	12.8%	2.5%	100.0%
	週に1～3回程度	125	173	68	23	389
		32.1%	44.5%	17.5%	5.9%	100.0%
	月に1～3回程度	74	119	57	10	260
		28.5%	45.8%	21.9%	3.8%	100.0%
	年に数回以下	83	202	110	39	434
		19.1%	46.5%	25.3%	9.0%	100.0%
	そもそも食べない	51	105	76	40	272
		18.8%	38.6%	27.9%	14.7%	100.0%
合計		773	1053	446	138	2410
		32.1%	43.7%	18.5%	5.7%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　184.245　df=12　P＜0.001 ***

表 17-2　親との夕食頻度と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
親との夕食頻度	ほぼ毎日	613	718	236	54	1621
		37.8%	44.3%	14.6%	3.3%	100.0%
	週に1～3回程度	124	240	129	30	523
		23.7%	45.9%	24.7%	5.7%	100.0%
	月に1～3回程度	19	56	41	15	131
		14.5%	42.7%	31.3%	11.5%	100.0%
	年に数回以下	6	19	23	13	61
		9.8%	31.1%	37.7%	21.3%	100.0%
	そもそも食べない	5	6	11	14	36
		13.9%	16.7%	30.6%	38.9%	100.0%
合計		767	1039	440	126	2372
		32.3%	43.8%	18.5%	5.3%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　240.284　df=12　P＜.001　***

表 17-1、表 17-2 に示すように、朝食、夕食ともに親と一緒にとる回数が少ない生徒ほど、家族の絆が強いと思う割合が低くなり、親と一緒にとる回数が多い生徒ほど、家族の絆が強いと思う割合が高くなる。また、二つの表をあわせると、夕食よりも朝食を親と一緒にとる生徒のほうが家族の絆が強いと感じる傾向があることがうかがえる。

次に、親との会話時間と家族の絆の強弱感との関係について見ると、表 18-1、18-2 に示すように、父親、母親ともに会話する時間が長い生徒ほど、家族の絆が強いと思う割合

が高くなる。ただし、母親と比べて、父親とは会話時間が短くても家族の絆が強いと感じている割合が高い上、父親との会話時間が長ければ長いほど家族の絆が強いと思う割合が高いことが見いだされる。

表 18-1　　父親との会話時間と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
父親との会話時間	ほとんどない	116	252	209	91	668
		17.4%	37.7%	31.3%	13.6%	100.0%
	15分未満	129	289	120	27	565
		22.8%	51.2%	21.2%	4.8%	100.0%
	15分～30分未満	127	221	52	8	408
		31.1%	54.2%	12.7%	2.0%	100.0%
	30分～1時間未満	170	163	33	4	370
		45.9%	44.1%	8.9%	1.1%	100.0%
	1時間～2時間未満	108	69	17	3	197
		54.8%	35.0%	8.6%	1.5%	100.0%
	2時間以上	103	27	4	1	135
		76.3%	20.0%	3.0%	.7%	100.0%
合計		753	1021	435	134	2343
		32.1%	43.6%	18.6%	5.7%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　464.170　df=15　P＜.001　***

表 18-2　母親との会話時間と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
母親との会話時間	ほとんどない	22	30	57	37	146
		15.1%	20.5%	39.0%	25.3%	100.0%
	15分未満	47	155	120	39	361
		13.0%	42.9%	33.2%	10.8%	100.0%
	15分～30分未満	113	258	104	32	507
		22.3%	50.9%	20.5%	6.3%	100.0%
	30分～1時間未満	207	255	83	13	558
		37.1%	45.7%	14.9%	2.3%	100.0%
	1時間～2時間未満	151	199	50	10	410
		36.8%	48.5%	12.2%	2.4%	100.0%
	2時間以上	226	147	28	5	406
		55.7%	36.2%	6.9%	1.2%	100.0%
合計		766	1044	442	136	2388
		32.1%	43.7%	18.5%	5.7%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　446.582　df=15　P＜.001　***

(2)親との信頼関係と家族の絆の強弱感

それでは、親との信頼関係と家族の絆の強弱感との関連性について見てみたい。

表 19-1 に示すように、父親への信頼感が高い生徒ほど家族の絆が強いと思っており、反対に父親への信頼感が低い生徒ほど家族の絆が弱いと思っている傾向にある。

表 19-1　　父親への信頼感と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
父親への信頼感	高い	556	278	27	7	868
		64.1%	32.0%	3.1%	.8%	100.0%
	やや高い	114	465	133	10	722
		15.8%	64.4%	18.4%	1.4%	100.0%
	やや低い	22	127	119	21	289
		7.6%	43.9%	41.2%	7.3%	100.0%
	低い	9	31	67	52	159
		5.7%	19.5%	42.1%	32.7%	100.0%
合計		701	901	346	90	2038
		34.4%	44.2%	17.0%	4.4%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　1103.045　df=9　p<.001　***

同様に、表 19-2 に示すように、母親への信頼感が高い生徒ほど家族の絆が強いと思っており、反対に母親への信頼感が低い生徒ほど家族の絆が弱いと思っている傾向にある。また、この二つの表から、母親よりも、父親への信頼感が高い生徒のほうが、家族の絆が強いと思っている傾向にあることがわかる。

表 19-2　　母親への信頼感と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
母親への信頼感	高い	642	432	61	11	1146
		56.0%	37.7%	5.3%	1.0%	100.0%
	やや高い	87	462	161	16	726
		12.0%	63.6%	22.2%	2.2%	100.0%
	やや低い	7	82	144	28	261
		2.7%	31.4%	55.2%	10.7%	100.0%
	低い	0	6	26	43	75
		.0%	8.0%	34.7%	57.3%	100.0%
合計		736	982	392	98	2208
		33.3%	44.5%	17.8%	4.4%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　1340.146　df=9　p<.001　***

また、表 19-3 に示すように、親の自分に対する不信感が低いと思っている生徒ほど家族の絆が強いと思っている傾向にある。

ただし、親の自分に対する不信感が「高い」と思っている生徒においても、47.1%は家族の絆が強いと思っていることがわかる。これは、親が自分に対して信頼感をもっていないと思うからこそ、親以外の家族たとえば祖父母やきょうだいなどとの家族の絆が強まるからとも考えられる。

表 19-3　親の自分に対する不信感と家族の絆の強弱感とのクロス表

		家族の絆が強いと思うか				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
親の自分に対する不信感	低い	296	224	60	24	604
		49.0%	37.1%	9.9%	4.0%	100.0%
	やや低い	237	448	210	33	928
		25.5%	48.3%	22.6%	3.6%	100.0%
	やや高い	85	198	81	25	389
		21.9%	50.9%	20.8%	6.4%	100.0%
	高い	41	26	8	12	87
		47.1%	29.9%	9.2%	13.8%	100.0%
合計		659	896	359	94	2008
		32.8%	44.6%	17.9%	4.7%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　160.744　df=9　p<.001　***

以上から、家族との関係性と家族の絆の強弱感についてまとめると、親との共有行動――食事の頻度、会話の時間――が多い生徒ほど、家族の絆が強いと思っており、親との相互信頼感――親への信頼感、親の自分に対する信頼感――が高い生徒ほど家族の絆が強いと思っていることが見いだされる。

3. まとめ

本章で得られた知見を以下、整理しておきたい。

＜知見 1＞家族の絆の強弱感は、性別で差がみられないが、中高別では差がみられ、中学生のほうが高校生よりも、家族の絆が強いと思う傾向にある。

＜知見 2＞家族の絆の強弱感は居住地によって差が見られる。

＜知見 3＞親との共有行動が多い生徒ほど家族の絆が強いと思っており、親との相互信頼感が高い生徒ほど家族の絆が強いと思っている。

第 5 章　家族の絆の強弱感と自己評価――自己肯定感と自立力――

1. 自己評価――自己肯定感と自立力――

「序」において述べたように、近年の日本の子どもたちは、自信がない、将来に希望をもてない、幸福度が低いなどと言われる。現在のような、自分を取り巻く環境が激しい変化にさらされていたり、不安定な社会情勢の中にあっても、なお自分が生きていく力を持ち続けるためには、「自分が好きで、自分を大切にする」「自分の存在を自分で受け入れる考えを持つことは、たいへん重要なこと」である（古荘　2009：　29-30）。

ここでは、青少年の自己評価に焦点をあて、家族の絆の強弱感が自己評価と関連するのかを明らかにするとともに、自己評価を高めるうえでの課題を明らかにする。

そこで、まず青少年の自己評価を測定するためのものさし（尺度）を作ることにする。アンケート調査票のなかの問 13 の質問項目を用いて、因子分析を行うことにした。ここでの因子分析の方法としては、主因子法によりバリマックス回転を行い、因子負荷量が概ね 0.4 以下の項目を削除しながら、因子分析を繰り返して、表 19 のような結果を得た。

第 1 因子は、「B　毎日が楽しい」、「D　自分の長所も欠点もありのままに認めることができる」、「A　自分に自信がある」、「C　自分の考えややり方が友達とちがっていても気にならない」、「F　はじめての人とでも、ふつうに話ができるほうだ」の 5 項目が高い因子負荷量を示しており、このことから、この因子を、「自己肯定感」因子と解釈する。

第 2 因子は、「L　自分の人生は自分で決める」、「K　将来、自分の生活費は自分でかせぎたい」の 2 項目が高い因子負荷量を示していることから、「自立力」因子と解釈する。

次に、それぞれの因子に高い因子負荷量を占める項目を用いて自己評価を測定する尺度を構成する。そのために、各因子に高い因子負荷量を示す項目が一次元尺度を構成するうえでふさわしいかどうかを測定するために、クロンバッハの信頼性係数を求めた。その結果、第 1 因子は 0.709、第 2 因子は 0.650 となった。クロンバッハの信頼性係数は、経験的におおむね 0.7 以上が望ましい。今回の分析では、第 2 因子は 0.7 にはやや満たないが、今回の調査において、他の尺度を構成できないことから、今回はこの結果を用いて、自己評価尺度を構成することを断っておきたい。

自己評価を測る尺度として、「自己肯定感」「自立力」の 2 種の尺度を構成する。具体的には、それぞれに該当する項目への回答において、自己評価が高いほど、「あてはまる」1 点、「まああてはまる」2 点、「あまりあてはまらない」3 点、「あてはまらない」4 点とした 4 件法の点数を加算し、合計をひとりひとりの得点とする。自己評価が高いほど、低い得点を示すことになる。

表 19　自己評価に関する因子分析結果

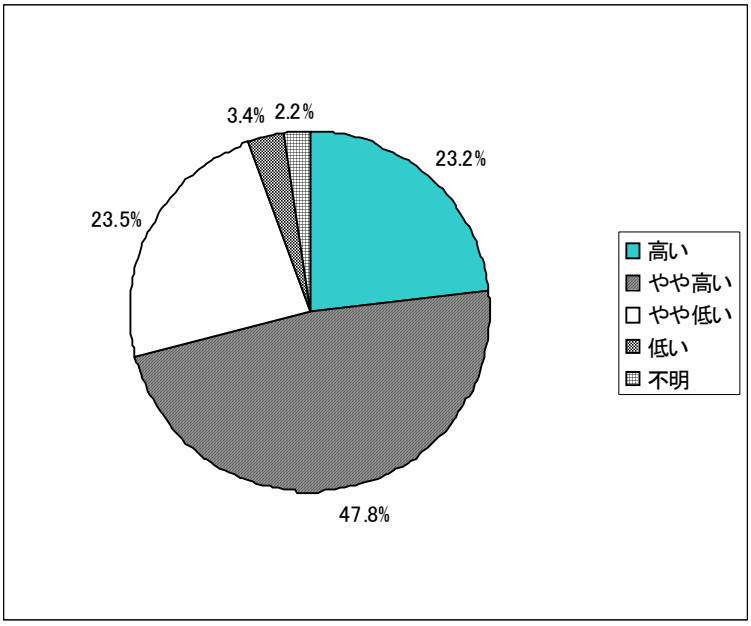
自己評価項目	第 1 因子	第 2 因子
B 毎日が楽しい	**0.633**	0.104
D 自分の長所も欠点もありのままに認めることができる	**0.623**	0.180
A 自分に自信がある	**0.606**	0.051
C 自分の考えややり方が友達とちがっていても気にならない	**0.488**	0.157
F はじめての人とでも、ふつうに話ができるほうだ	**0.464**	0.170
L 自分の人生は自分で決める	0.155	**0.696**
K 将来、自分の生活費は自分でかせぎたい	0.143	**0.653**
寄与率	23.6	14.4
累積寄与率	23.6	38.1
クロンバッハの信頼性係数	0.709	0.650
因子解釈	自己肯定感	自立力

因子抽出法: 主因子法　回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

その上で、自己肯定感は 5 点～8 点を「高い」、9 点～12 点を「やや高い」、13 点～16 点を「やや低い」、17 点～20 点を「低い」とし、自立力は、2 点を「高い」、3 点～4 点を「やや高い」、5 点～6 点を「やや低い」、7 点～8 点を「低い」とした。

図 8-1、図 8-2 は自己評価尺度を用いて、対象者全員の自己評価度を測定したものである。図 8-1 に示すように、自己肯定感が「高い」生徒は 23.2%、「やや高い」生徒は 47.8%となっており、両者を合わせると、71.0%の生徒は自己肯定感が高いといえる。

図 8-1　中高生の自己肯定感



また、図 8-2 に示すように、自立力の高い生徒は 44.7%、やや高い生徒は 43.9%となっており、両者を合わせると、88.6%の生徒は自立力が高いといえる。

図 8-2　中高生の自立力

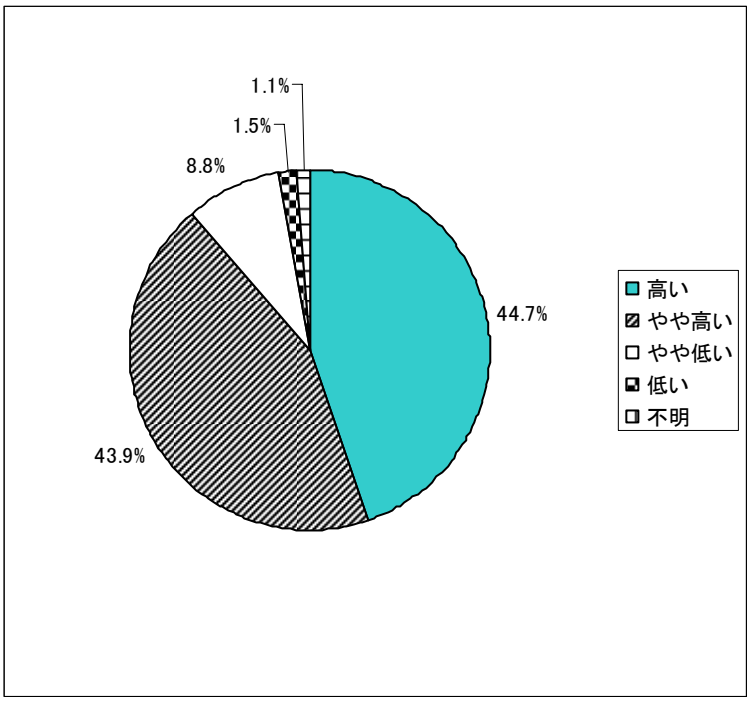


表 20-1 に示すように、自己肯定感は性別によって差がみられた。「高い」と「やや高い」を合わせて、男子は 75.2%、女子は 66.2%となり、男子のほうが女子よりも自己肯定感が高い傾向にある。

表 20-1　性別と自己肯定感とのクロス表

		自己肯定感				
		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
	男子	465	881	393	52	1791
		26.0%	49.2%	21.9%	2.9%	100.0%
	女子	118	339	202	32	691
		17.1%	49.1%	29.2%	4.6%	100.0%
合計		583	1220	595	84	2482
		23.5%	49.2%	24.0%	3.4%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　32.216　df=3　p＜.001 ***

また、表 20-2 に示すように、自己肯定感は中高別によっても差が見られた。「高い」と「やや高い」を合わせて、中学生は 80.2%、高校生は 67.1%となり、中学生のほうが高校生よりも、自己肯定感が高い傾向にある。

表 20-2　中高別と自己肯定感とのクロス表

		自己肯定感				
		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
	中学生	347	499	187	21	1054
		32.9%	47.3%	17.7%	2.0%	100.0%
	高校生	240	720	408	64	1432
		16.8%	50.3%	28.5%	4.5%	100.0%
合計		587	1219	595	85	2486
		23.6%	49.0%	23.9%	3.4%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　108.441　df=3　p＜.001　***

学年別に詳しく見れば、表 20-3 に示すように、中学生、高校生とも、2 年生のとき、いったん自己肯定感がやや低くなるという特徴をもっていることがわかる。2 年生はそれぞれ中学校、高校の生活にひととおり慣れた頃であり、3 年生のように受験という明白で差し迫った目標がない。そういう時期ゆえに自己肯定感がやや下がるとも解釈できるのではないだろうか。

表 20-3　学年別と自己肯定感とのクロス表

		自己肯定感				
		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
	中学1年	129	164	52	8	353
		36.5%	46.5%	14.7%	2.3%	100.0%
	中学2年	115	172	77	9	373
		30.8%	46.1%	20.6%	2.4%	100.0%
	中学3年	103	163	58	4	328
		31.4%	49.7%	17.7%	1.2%	100.0%
	高校1年	73	229	135	16	453
		16.1%	50.6%	29.8%	3.5%	100.0%
	高校2年	86	277	174	34	571
		15.1%	48.5%	30.5%	6.0%	100.0%
	高校3年	81	214	99	14	408
		19.9%	52.5%	24.3%	3.4%	100.0%
合計		587	1219	595	85	2486
		23.6%	49.0%	23.9%	3.4%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　129.082　df=15　p＜. 001　***

一方、表 21-1 に示すように、自己肯定感と同様、自立力も男女別によっては差が見られた。「高い」と「やや高い」を合わせて、男子は 91.2%、女子は 85.9%となり、自立力も男子のほうが女子よりも高い傾向にある。

表 21-1　性別と自立力とのクロス表

			自立力				
			高い	やや高い	やや低い	低い	合計
	男性	度数	860	787	136	24	1807
		性別の%	47.6%	43.6%	7.5%	1.3%	100.0%
	女性	度数	271	331	86	13	701
		性別の%	38.7%	47.2%	12.3%	1.9%	100.0%
合計		度数	1131	1118	222	37	2508
		性別の%	45.1%	44.6%	8.9%	1.5%	100.0%

注:Pearsonのカイ二乗値　24.239　df=3　P＜.001　***

ただし、表21-2に示すように、自立力は中高別では差がそれほど見られなかった。中学生と高校生とでは、体力的にも精神的にも差が出てくるはずであるが、両者において自立力に差がないということは、今日の中高生においてはいずれも「まだ社会に出る前の学齢期にある」という認識が普遍しているからかもしれない。

表 21-2　中高別と自立力とのクロス表

		自立力				
		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
中高別	中学生	477	478	96	17	1068
		44.7%	44.8%	9.0%	1.6%	100.0%
	高校生	659	638	126	21	1444
		45.6%	44.2%	8.7%	1.5%	100.0%
合計		1136	1116	222	38	2512
		45.2%	44.4%	8.8%	1.5%	100.0%

注:カイ二乗値　.299　df＝3　p＝.960

ただし、表21-3に示すように、中学生、高校生のいずれも3年生がもっとも自立力が高い傾向にある。最後の学年であり、受験を目前にひかえて自らの進路について決定を下さなければならない時期になるからこそ自立力が高まるのであろう。

表21-3　学年別と自立力とのクロス表

		自立力				
		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
学年	中学1年	153	156	43	7	359
		42.6%	43.5%	12.0%	1.9%	100.0%
	中学2年	164	172	32	10	378
		43.4%	45.5%	8.5%	2.6%	100.0%
	中学3年	160	150	21	0	331
		48.3%	45.3%	6.3%	.0%	100.0%
	高校1年	209	209	38	4	460
		45.4%	45.4%	8.3%	.9%	100.0%
	高校2年	253	257	52	11	573
		44.2%	44.9%	9.1%	1.9%	100.0%
	高校3年	197	172	36	6	411
		47.9%	41.8%	8.8%	1.5%	100.0%
合計		1136	1116	222	38	2512
		45.2%	44.4%	8.8%	1.5%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　20.490　df＝15　p＝.154

2.家族の絆の強弱感と自己評価

それでは、家族の絆の強弱感と自己評価の関連について見てみたい。
まずは家族の絆の強弱感と自己肯定感との関連であるが、表 22-1 に示すように、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感が高く、家族の絆が弱いと思っている生徒ほど、自己肯定感が低いことが見いだされる。

表 22-1　家族の絆の強弱感と自己肯定感とのクロス表

		自己肯定感				
		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
家族の絆が強いと思うか	そう思う	309	337	110	11	767
		40.3%	43.9%	14.3%	1.4%	100.0%
	ややそう思う	191	576	253	24	1044
		18.3%	55.2%	24.2%	2.3%	100.0%
	あまりそう思わない	39	218	166	17	440
		8.9%	49.5%	37.7%	3.9%	100.0%
	そう思わない	21	52	39	26	138
		15.2%	37.7%	28.3%	18.8%	100.0%
合計		560	1183	568	78	2389
		23.4%	49.5%	23.8%	3.3%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　343.863　df=9　p＜.001　***

次に、家族の絆の強弱感と自立力の関連をみたい。表 22-2 に示すように、自立力も自己肯定感と同様であり、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自立力が高く、家族の絆が

弱いと思っている生徒ほど自立力の低い傾向がある。

とはいえ、「家族の絆が強いと思うか」という問いに対して「そう思わない」と答えている生徒の 55.1%は自立力が高いことがわかる。

表 22-2　家族の絆の強弱感と自立力とのクロス表

		自立力				
		高い	やや高い	やや低い	低い	合計
家族の絆が強いと思うか	そう思う	398	313	59	6	776
		51.3%	40.3%	7.6%	.8%	100.0%
	ややそう思う	433	521	89	8	1051
		41.2%	49.6%	8.5%	.8%	100.0%
	あまりそう思わない	189	208	46	4	447
		42.3%	46.5%	10.3%	.9%	100.0%
	そう思わない	76	34	15	13	138
		55.1%	24.6%	10.9%	9.4%	100.0%
合計		1096	1076	209	31	2412
		45.4%	44.6%	8.7%	1.3%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　114.102　df=9　p<.001　***

家族の絆が強い生徒ほど自立力が高く、家族の絆が弱いと思っている生徒ほど自立力が低い傾向があるが、しかし一方では、家族の絆が弱いからこそ、自分で生きていくために自立力が高くなるとも解釈できよう。

また、家族の絆の強弱感と自己肯定感、自立力との関連性は性別によって差が見られた。表 23-1 に示すように、男子のほうが女子よりも、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感が高い傾向にある。

表 23-1　性別と家族の絆の強弱感と自己肯定感とのクロス表

			自己肯定感				
			高い	やや高い	やや低い	低い	合計
男子	家族の絆が強いと思うか	そう思う	236	227	61	4	528
			44.7%	43.0%	11.6%	.8%	100.0%
		ややそう思う	155	421	166	15	757
			20.5%	55.6%	21.9%	2.0%	100.0%
		あまりそう思わない	31	164	118	11	324
			9.6%	50.6%	36.4%	3.4%	100.0%
		そう思わない	17	36	24	18	95
			17.9%	37.9%	25.3%	18.9%	100.0%
	合計		439	848	369	48	1704
			25.8%	49.8%	21.7%	2.8%	100.0%
女子	家族の絆が強いと思うか	そう思う	69	110	49	7	235
			29.4%	46.8%	20.9%	3.0%	100.0%
		ややそう思う	35	152	84	9	280
			12.5%	54.3%	30.0%	3.2%	100.0%
		あまりそう思わない	5	54	46	5	110
			4.5%	49.1%	41.8%	4.5%	100.0%
		そう思わない	2	16	15	7	40
			5.0%	40.0%	37.5%	17.5%	100.0%
	合計		111	332	194	28	665
			16.7%	49.9%	29.2%	4.2%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　285.818　df=9　p＜.001　***

同様に、表 23-2 に示すように、男子のほうが女子よりも、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自立力が高い傾向にある。

表 23-2　性別と家族の絆の強弱感と自立力とのクロス表

			自立力				
			高い	やや高い	やや低い	低い	合計
男子	家族の絆が強いと思うか	そう思う	299	194	37	3	533
			56.1%	36.4%	6.9%	.6%	100.0%
		ややそう思う	317	385	51	6	759
			41.8%	50.7%	6.7%	.8%	100.0%
		あまりそう思わない	148	148	31	2	329
			45.0%	45.0%	9.4%	.6%	100.0%
		そう思わない	57	22	7	10	96
			59.4%	22.9%	7.3%	10.4%	100.0%
	合計		821	749	126	21	1717
			47.8%	43.6%	7.3%	1.2%	100.0%
女子	家族の絆が強いと思うか	そう思う	95	119	22	3	239
			39.7%	49.8%	9.2%	1.3%	100.0%
		ややそう思う	113	133	37	2	285
			39.6%	46.7%	13.0%	.7%	100.0%
		あまりそう思わない	38	59	14	1	112
			33.9%	52.7%	12.5%	.9%	100.0%
		そう思わない	17	12	8	2	39
			43.6%	30.8%	20.5%	5.1%	100.0%
	合計		263	323	81	8	675
			39.0%	47.9%	12.0%	1.2%	100.0%

注:pearsonのカイ二乗値　114.299　df=9　p＜.001　***

以上のデータから、男子のほうが女子よりも、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感、自立力が高い傾向にあることがうかがえる。

それでは次に、性別と自己肯定感と自立力をクロスさせて見てみたい。

表 24-1 に示すように、男女ともに、自己肯定感が高い生徒ほど自立力が高いが、男子のほうが女子よりも、自己肯定感が高い生徒ほど自立力が高いという傾向にある。

表 24-1　性別と自己肯定感と自立力とのクロス表

			自立力				
			高い	やや高い	やや低い	低い	合計
男子	自己肯定感	高い	321	123	18	1	463
			69.3%	26.6%	3.9%	.2%	100.0%
		やや高い	354	462	62	3	881
			40.2%	52.4%	7.0%	.3%	100.0%
		やや低い	158	177	53	2	390
			40.5%	45.4%	13.6%	.5%	100.0%
		低い	16	17	3	16	52
			30.8%	32.7%	5.8%	30.8%	100.0%
	合計		849	779	136	22	1786
			47.5%	43.6%	7.6%	1.2%	100.0%
女子	自己肯定感	高い	61	45	11	1	118
			51.7%	38.1%	9.3%	.8%	100.0%
		やや高い	124	178	33	4	339
			36.6%	52.5%	9.7%	1.2%	100.0%
		やや低い	74	89	38	1	202
			36.6%	44.1%	18.8%	.5%	100.0%
		低い	10	12	3	6	31
			32.3%	38.7%	9.7%	19.4%	100.0%
	合計		269	324	85	12	690
			39.0%	47.0%	12.3%	1.7%	100.0%

男子のpearsonのカイ二乗値　518.551　df=9　p＜.001　***
女子のpearsonのカイ二乗値　79.076　df=9　p＜.001　***

また、表 24-2 に示すように、男女ともに、自立力が高い生徒ほど自己肯定感が高いが、男子のほうが女子よりも、自立力が高い生徒ほど自己肯定感が高いという傾向にある。

表 24-2　性別と自立力と自己肯定感とのクロス表

			自己肯定感				
			高い	やや高い	やや低い	低い	合計
男子	自立力	高い	321	354	158	16	849
			37.8%	41.7%	18.6%	1.9%	100.0%
		やや高い	123	462	177	17	779
			15.8%	59.3%	22.7%	2.2%	100.0%
		やや低い	18	62	53	3	136
			13.2%	45.6%	39.0%	2.2%	100.0%
		低い	1	3	2	16	22
			4.5%	13.6%	9.1%	72.7%	100.0%
	合計		463	881	390	52	1786
			25.9%	49.3%	21.8%	2.9%	100.0%
女子	自立力	高い	61	124	74	10	269
			22.7%	46.1%	27.5%	3.7%	100.0%
		やや高い	45	178	89	12	324
			13.9%	54.9%	27.5%	3.7%	100.0%
		やや低い	11	33	38	3	85
			12.9%	38.8%	44.7%	3.5%	100.0%
		低い	1	4	1	6	12
			8.3%	33.3%	8.3%	50.0%	100.0%
	合計		118	339	202	31	690
			17.1%	49.1%	29.3%	4.5%	100.0%

男子のpearsonのカイ二乗値　518.551　df=9　p＜.001　***
女子のpearsonのカイ二乗値　79.076　df=9　p＜.001　***

言い換えれば、女子は男子ほど、自己肯定感の高さと自立力の高さが互いに関連しているとはいえない。

家族の絆の強弱感と自己評価――自己肯定感と自立力――についての分析を整理すると、以下のことが明らかになった。全般的には、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感、自立力が高い。ただし、男子のほうが女子よりも、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感、自立力が高い。また、男子のほうが女子よりも、自己肯定感の高さと自立力の高さは関連しており、自己肯定感が高いほど自立力が高く、また自立力が高いほど自己肯定感が高い。

3. まとめ

本章で得られた知見を以下、整理しておきたい。

＜知見 1＞自己肯定感は、男子のほうが女子よりも高く、中学生のほうが高校生よりも高い傾向にある。

＜知見 2＞自立力は、男子のほうが女子よりも高い傾向にあり、中高別では差がみられな

い。

＜知見 3＞家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感が高く、家族の絆が弱いと思っている生徒ほど自己肯定感が低い傾向にある。

＜知見 4＞家族の絆が強いと思っている生徒ほど自立力が高く、家族の絆が弱いと思っている生徒ほど自立力が低い傾向にある。

＜知見 5＞男子のほうが女子よりも、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感、自立力が高い傾向にある。

＜知見 6＞男子のほうが女子よりも、自己肯定感のと自立力の高さが関連しており、自己肯定感が高いほど自立力が高く、また自立力が高いほど自己肯定感が高い。

第 6 章　家族の絆の構築方法と理想とする家族の絆のあり方について

1. 家族の絆が強まった経験

「あなたはこれまでの経験の中で、何をしたことによって、つぎの人とのきずなが強まったと感じますか」という問いに対して、父親、母親、きょうだい、祖父母の別に、次の 13 の選択肢のうちから 3 つまで選択してもらった。

① 同じ姓を名乗ること
② 一緒に住むこと
③ 一緒に家で食事をしたこと
④ 一緒に買い物や外食をしたこと
⑤ 一緒に趣味・スポーツ・ゲームをしたこと
⑥ 一緒に旅行したこと
⑦ 一緒にハイキング・キャンプに行ったこと
⑧ 一緒にお葬式や結婚式に参加したこと
⑨ 一緒に会話したこと
⑩ 一緒に困難に立ち向かったこと
⑪ 一緒に家族の介護、看護をしたこと
⑫ 自分の気持ちを受け止めてくれたこと
⑬ 経済的に面倒をみてもらったこと

表 25　家族の絆が強まったと感じる経験

父親と	
1.一緒に住むこと	50.4%
2.一緒に家で食事をしたこと	30.4%
3.一緒に趣味・スポーツ・ゲームをしたこと	24.9%

母親と	
1.一緒に住むこと	52.7%
2.一緒に家で食事をしたこと	33.9%
3.一緒に会話したこと	31.4%

きょうだいと	
1.一緒に住むこと	47.0%
2.一緒に趣味・スポーツ・ゲームをしたこと	40.2%
3.一緒に会話したこと	33.9%

祖父母と	
1.一緒に会話したこと	42.9%
2.一緒に家で食事をしたこと	34.2%
3.一緒に会話したこと	28.4%

結果、表 25 に示すように、父親、母親とはともに「一緒に住むこと」がもっとも選ば

れ、次いで「一緒に家で食事をしたこと」が選ばれている。その次に、父親とは「一緒に趣味・スポーツ・ゲームをしたこと」、母親とは「一緒に会話したこと」が選ばれている。

きょうだいとは、「一緒に住むこと」がもっとも選ばれ、次いで「一緒に趣味・スポーツ・ゲームをしたこと」が選ばれ、その次に「一緒に会話したこと」が選ばれている。この他、父親、母親、きょうだいとも、第5位には「同じ姓を名乗ること」が挙がっている。

祖父母とは、「一緒に会話したこと」、「一緒に家で食事をしたこと」、「一緒に買い物や外食をしたこと」の順で選ばれている。「一緒に住むこと」の順位がやや落ちるのは、本調査対象の中高生において祖父母と実際に一緒に住んでいる三世代世帯の割合がおよそ 22%であり、ほぼ同じ割合で家族の絆が強まった経験として選ばれているのであろう。

いずれにせよ、父親、母親、きょうだいと家族の絆が強まった経験の上位3位は「一緒に住むこと」、「一緒に家で食事したこと」、「一緒に趣味・スポーツ・ゲームをしたこと」、「一緒に会話したこと」の4項目にしぼられる。

また、自由解答欄で「家族の絆が強まったと感じた思い出」を記述してもらったところ、もっとも多かったのは「旅行」(219人)、次に「外出・外食」(99人)であった。

「旅行」については、具体的に「沖縄旅行」、「ハワイ旅行」、「北海道旅行」、「岡山へ旅行」と行き先が書かれている場合もあれば、「スキー旅行」と旅行の目的が書かれている場合もあった。「外出」では、具体的には、「キャンプ」や「ハイキング」、「スポーツ」などのアウトドア活動に次いで、「ディズニーランド」などのテーマパークや水族館、プールなどの施設、姫路城などの観光地に行ったこと、「田植え」などの季節の行事が挙げられている。

また、家族内で起こる困難な状況――「病気・死・事故」(50人)、「ケンカ・離婚」(10人)と答えている生徒もあった。「病気・死・事故」については、たとえば次のような回答があった。

「お母さんが熱を出した時です。家事はほとんどお母さんだったので、とても苦労しました。でも、こんな出来事があったから3人で協力出来て、お母さんの大事さを感じられたのだと思います。」(中1女子、東播磨)

「母の乳ガンが発見されて、入院した時に、父と姉と一緒に家の中の家事をがんばってこなし、またみんなで母を励ました。」(高1男子、東播磨)

「兄のお葬式。5人だった家族が4人になり、これからは、家族4人で、どんなことも乗り越えていこうと思いました。」(高2女子・西播磨)

「祖父が亡くなったときに、家族皆が集まって自然と祖父の周りに皆が集まって9人そろって会話した時」(高3女子・東播磨)

「弟が車にひかれた時にみんなが助けあって、親をよんだり、救急車をよんだりしたこと」(中1男子、阪神南)

「私が骨折したときに助けてくれた、介抱してくれた」（高 3 男子、阪神北）

その他、家族外で起こる困難な状況、たとえば「受験・進路の悩み」(29 人)、「自然災害（阪神大震災、台風など)」（12 人)、「いじめ」(3 人)という回答も見られた。このように、突発的に家族内、家族外で発生した困難な状況さえも、それを家族とともに乗り越えたときに家族の絆が築かれるものと考えていることがわかる。

これらの自由回答と先の選択肢による回答を合わせると、今日の中高生にとって家族の絆が強まった経験は以下の 3 つに整理できる。

①家庭の中での「意」(意思疎通、コミュニケーション)、「食」、「住」の共同
②家庭の外での娯楽(旅行、外出、外食など)の共同
③家族内外で発生した困難な状況の克服

2. 理想とする家族の絆のあり方

最後に、自由回答から、中高生にとって理想とする家族の絆のあり方について、どのように考えているのかを見てみたい。

「あなたにとって理想の『家族のきずな』とは、どんなものですか」という質問に対して自由回答をしてもらった。記述された回答は、おおむね (1) 家族成員間の関係性の状態について、(2) 家族成員間の関係性のイメージについて、(3) 家族成員間の関係性を具体化した行為について、という 3 種類に分類できる。それぞれ特徴的なものを紹介しておきたい。

(1) 家族成員間の関係性の状態について

「毎日一緒にいて、何でも話し合える」（中 2 女子・東播磨）

「いっしょにいて楽しい」（中二男子・東播磨）

「いつも一緒に笑っていられる。少しケンカも出来るくらいの仲」（中 2 男子・東播磨）

「どんなことでも話し合えて、つらいこととかも一緒にのりこえていく」（中 3 女子・但馬）

「それぞれの気持ちをちゃんと理解して、共に分かち合う。かといって甘くはせず、時に厳しくする。つらい時には支え、うれしい時は共に喜ぶ」（中 1 女子・但馬）

「もちつ、もたれつの関係」（高 1 男子・神戸）

「絶対的な信頼関係」（高 3 男子・阪神南）

「根がつながっていること」（中 2 女子・東播磨）

「切っても切れないもの」（高 1 男子・西播磨）

「『ゴム』だと思う。ゴムってひっぱってもはなしたら縮んでもどってくる。はなれても、どんなことがあってもちぎれない強さ」（中 1 女子・東播磨）

「何があっても・・・周りみんなが信じてくれなくても・・・周りみんなが敵になっても・・・絶対に裏切らず味方でいて、支えてくれる」（高 3 女子・東播磨）

「隠しごとがないこと」（高 3 女子・阪神南）

(2) 家族成員間の関係性のイメージについて

「大切なもの」（高 2 女子・阪神北）（中 1 男子・神戸）など

「かけがえのないもの」（高 2 女子・東播磨）、（高 3 男子・神戸）

「他にかえがたいもの」（高 2 男子・阪神南）

「安心できるもの」（中 1 男子・阪神南）（高 1 女子・阪神北）

「強い運命みたいなもの」（中 2 女子・但馬）

「ゆるぎないもの」（高 2 男子・東播磨）

「やさしくていいもの」（中 3 女子・但馬）

「愛」（高 1 女子・阪神北）（高 1 男子・西播磨）など

「平和」（高 2 男子・東播磨）

「人生の宝物」（中 3 男子・神戸）

「やすらぎ」（中 2 男子・西播磨）

⑶ 家族成員間の関係性を具体化した行為

「学費を出してくれ、飲食をさせてくれ、生活面で不便のないようにしてくれるもの」（中 3 男子・神戸）

「親が子供がめざしてる目標をおうえんしてくれる」（中 3 男子・東播磨）

「お互いに相談に乗り合って問題を解決していくことができる」（高 2 女子・東播磨）

「みんなで一緒に何かすること。仲良くいろんなことをしたり、ごはんをみんなで食べたり、悩みごととか、相談ごととか真剣にちゃんと聞いてくれたりすること」（高 1 女子・阪神南）

「同じ姓を名乗ること」（中 1 女子・東播磨）

「一緒にくらす」（中 3 男子・阪神南）

「一緒にご飯を食べること」（中 3 男子・神戸）（高 1 男子・阪神南）など

「みんなで買い物とかに行く」（中 2 女子・但馬）など

「いろいろの所にあそびにいったりすること」（中 2 男子・但馬）

「同じリビングでみんなで会話すること」（中 3 女子・但馬）

「Communication」（高 3 男子・淡路）

「笑い合える」（中 3 男子・但馬）

⑷ その他

「ただの金づる」（高 2 男子・神戸）
「金をくれる」（高 1 男子・阪神南）

「どうでもいいもの」（高 1 男子・阪神南）

「親友とは違うつながりを持ち合って互いに支えあえたりする人なら血のつながりが無くとも、家族なのだ。僕は家族が嫌いですが僕が『家族』だと思っている人は、絆で結ばれていると信じたい」（高 3 男子・神戸）

「理想なない」（高 1 男子・阪神南）

「理想の『家族の絆』とは何か」という問いに対して、多くの自由記述が得られたが、中にはこのようなネガティブな回答や「理想の家族の絆」は存在しないという回答もあった。

ただ、自由回答で見られる特徴の一つは、家族の絆はもともと「ある」ものではなく、日々の生活の中で「つくる」ものであるという認識が中高生に共有されているということである。

3. まとめ

本章で得られた知見を以下、整理しておきたい。

＜知見 1＞中高生における家族の絆が強まった経験は、家庭の中での「意」（意思疎通、コミュニケーション、「食」、「住」の共同、家庭の外での娯楽の共同、家族内外で発生した困難な状況の克服である。

＜知見 2＞中高生にとって、理想とする家族の絆のあり方は、家族成員間の関係性の状態、家族成員間の関係性のイメージ、家族成員間の関係性を具体化した行為に関するものに分けられる。

＜知見 3＞中高生において、家族の絆はもともと「ある」ものではなく、「つくる」ものであるという認識が根底に見いだされる。

第７章　まとめと提言

1. 分析結果のまとめ

今回、中高生を対象とした家族の絆に関する質問紙調査を行った結果、得られた知見を以下にまとめたい。

①　同居家族と「主観的家族」は必ずしも一致しない。

実際に同居している家族と「主観的家族」（同居している、同居していないにかかわらず家族と認識している人）とは必ずしも一致せず、同居していない人をも含めて家族とみなす生徒がいるとともに、同居している人を家族とみなしていない生徒も少なからず存在する。「主観的家族」の規模に影響を及ぼす要因の一つは家族との会話時間である。

②　家族は、生活上の欲求を満足させてくれる存在であり、精神的に支えてくれるかけがえのない存在であると同時に、「干渉される」存在、「わずらわしい」存在でもある。

家族をどのような存在として見ているかについては、8 割以上の生徒が生活上の欲求を満足させてくれる存在と思っており、6 割から 8 割の生徒が精神的に支えてくれるかけがえのない存在と思っていると同時に、5 割の生徒が「干渉される」存在、4 割の生徒が「わずらわしい」存在と思っている。

属性との関連を見れば、中学生のほうが高校生よりも「喜びや悲しみを分かち合える」存在と思っており、女子のほうが男子よりも、家族を「喜びや悲しみを分かち合える」存在と思っている。また、男子のほうが女子よりも、家族を「わずらわしい」存在と思っている。

③家族との関係性のあり方は家族の絆の強弱感に関連している。

家族の絆については、75.8%の生徒が「強い」と思っている。また、親との関係性との関連で見れば、親との共有行動――食事の頻度、会話の時間――が多い生徒ほど、家族の絆が強いと思っており、親との相互信頼感――親への信頼感、親の自分に対する信頼感――が高い生徒ほど家族の絆が強いと思っている。

④家族の絆の強弱感と自己肯定感、自立力は関連しているが、男女差が見られる。

全般的には、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感、自立力が高い。ただし、男子のほうが女子よりも、家族の絆が強いと思っている生徒ほど自己肯定感、自立力が高い。また、男子のほうが女子よりも、自己肯定感の高さと自立力の高さは関連しており、自己肯定感が高いほど自立力が高く、また自立力が高いほど自己肯定感が高い。

⑤家族の絆は「ある」ものではなく、「つくる」ものである。

家族の絆とはもともと「ある」ものではなく、日常生活の中で「つくる」ものである。家族の絆を「つくる」方法は、

・家庭の中での「意」（意思疎通、コミュニケーション）、「食」、「住」の共同
・家庭の外での娯楽（旅行、外食、スポーツなど）の共同
・家族内外でおきた困難な状況の克服

である。

2. 提言

今日、家族の形はますます多様化している。家族の形が多様化する中においても、家族も家族の絆も依然として壊滅はしていない。今後もこの世から消え去ることはないであろう。そして、家族の絆は依然として人が生きていく上で必要とする「人との絆」の一つである。自己肯定感、自立力に結びつく要因の一つでもある。家族の絆は今日において自然には生まれないことから、以下、分析結果のまとめを踏まえ、提言を行いたい。

①家庭における「意」、「食」、「住」の共同の重要性の提唱

家族の絆を構築するためには、家庭における「意」(意志疎通、コミュニケーション)と「食」（食事）と「住」を共にすることの重要性を、親や祖父母など大人たちが今一度認識する必要があると思われる。日常生活において極めて基本的な「意」、「食」、「住」の共同をどれほど行っているのかを見つめ直し、可能な範囲で実行しようというメッセージが県民に届くよう、さまざまな機会にさまざまな方法で繰り返し提唱していくことが望ましい。

②家庭の外での娯楽の共同を促す各種サービス、イベントの提供

日常生活において家庭の外で非日常を味わえる娯楽（旅行、外食、スポーツなど）の共同を通しても、家族の絆を構築できることから、文化施設やスポーツ施設、その他娯楽施設、およびこれらに付設されている飲食施設などにおいて、家族での利用を促す各種のサービスやイベントを提供することが有効であろう。県内各地において気候や地域の特性を利用した、家族で参加できるようなさまざまな仕掛けづくりも有効であると思われる。

③家族以外の人との絆を構築するための支援

人との絆は家族内に限られるわけではない。今日、家族というまとまりが強調されるあまり、すべてを家族が負わなければならないかのような状況を生み、家族は疲弊し、個人はますます生きにくくなるということが実感として広がっている。したがって、家族の絆だけでなく、家族以外の人との絆をも構築できるよう支援する必要がある。何らかの理由で家族の絆をつくることが困難な人たちへの支援はとりわけ重要であるといえる。

その結果精神的なダメージを受けているのであればなおさら、問題は大人よりも子どもたちのほうが表面化しにくい。大人であれば、自分の置かれた状況を自覚してカウンセリングを受けたり、何らかの処置をとることができるが、青少年たちは自分の置かれた状況を自覚できていない場合もある上、問題解決の必要性やその方法に考えが及ばなかったり

するからである。

　そのため、子どもたちのさまざまな心のケアをする人材、機関の設置やシステムが必要となる。学校や地域社会の公共施設などの既存の場所に、子どもたちを見守り、子どもたちの心に寄り添える人材が常にいるという体制を確立することが望まれる。

おわりに

「家族の崩壊」、「家族の絆の弱体化」という言葉は、昔の日本にはあたかも理想的で完成された家族の形、家族の絆が存在したかのような幻想を生じさせる。だが、家族史、社会史の研究においても明らかにされているように、歴史をふりかえれば家族の形も家族の絆も時代の推移とともに変化し、不変の完成形は存在しない。

本調査研究を通して、今日の中高生にとって家族の形は多様で、家族の絆とはもともと「ある」ものではなく、日常生活の中で「つくる」ものであるということが明らかになった。また、その方法はけっして目新しい、あるいは難しいものではなく、各家庭においていかようにも工夫してできることであった。

調査を終えた今、青少年の健全育成のために、私たち大人がいま一度立ち止まって彼らの心の奥にある思いと向き合い、自分の家族や自分自身を見つめ直してみることを提案したい。

ただ、人との絆は家族内に限られるわけではなく、家族の絆を強調するあまり、家族外の人々との絆を軽視することの危険性にも留意すべきであるのは言うまでもない。

「絆」自体を社会が作り出すことはできない。子どもや弱者に対して、信頼できる関係性を保証する方策を社会的に考えなくてはいけない時期にきている（山田　2001：　7）。

今後、家族や家族をとりまく社会が多様化する中で、個人が多様にのびやかに生きていける社会環境づくりをめざして、家族の絆とともに家族以外の人との絆をつくれるよう支援することも青少年の健全育成には必要であろう。

引用文献

古荘純一．2009.『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか　児童精神科医の現場報告』．光文社

柏木恵子・永久ひさ子．1996.「女性における『家族の絆』に関する心理学的研究――家族にしか果たせない『家族の機能』とは何か」,『安田生命社会事業団研究助成論文集』第 32 号，111-118.

国立国家図書館　調査及び立法考査局．2009.『青少年をめぐる諸問題　総合調査報告書』

文部科学省・国立教育政策研究所．2009.『平成 20 年度全国学力・学習状況調査報告書』

NHK 放送文化研究所．2003.『NHK　中学生・高校生の生活と意識調査』．日本放送出版協会

千石保．2005.『日本の女子中高生』．日本放送出版協会

芹沢俊介．2009.『家族という絆が断たれるとき』．批評社

多賀幹子．2008.『親たちの暴走　日英米のモンスターペアレント』．朝日新聞社

田中千穂子．2001.『ひきこもりの家族関係』．講談社

海野道郎・片瀬一男編．2008.『＜失われた時代＞の高校生の意識』．有斐閣

渡部真．2006.『現代青少年の社会学――対話形式で考える 37 章』．世界思想社

山田昌弘．1999.『家族のリストラクチュアリング』．新曜社

―――．2001.『家族というリスク』．勁草書房

―――．2004.『家族ペット』．サンマーク出版

資料

1. 質問紙
2. 単純集計

青少年の生き方を支える「家族の絆」の

構築戦略についてのアンケート

【ご協力のお願い】

最近の社会の変化のなかで、青少年の考え方や行動も変化しています。青少年の健全な育成のためには、「家族の絆」が重要であると考えられます。そこで、兵庫県の中高生を対象として、青少年にとってどのような「家族の絆」が必要であり、その「家族の絆」をどのように構築すればよいかについて調査研究を行うことになりました。

アンケートにお名前を書いていただく必要はありません。また、回答は統計的に処理され、個人が特定されることは一切ありませんので、どうぞありのままをお答えください。

なお、このアンケートへの回答内容による、あるいはアンケートに回答しないことによる不利益は一切発生しません。アンケートの趣旨をご理解いただき、どうか最後までアンケートにご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

ご不明な点やご質問がありましたら、下記までお問い合わせください。

（財）ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
共生社会づくり政策研究群（担当：成瀬千枝子）
〒651－0073　神戸市中央区脇浜海岸通 1－5－2
ひと未来館 6 階
Tel.０７８－２６２－５５７９

【記入についてのお願い】

- 回答はアンケートをお願いしたご本人が記入してください
- 回答はこのアンケート用紙に直接書き込んでください。
- ご記入いただいたアンケート用紙は、まことに恐れ入りますが、返信用封筒に入れて**平成２１年１０月１０日まで**に郵便ポストにご投函願います。
  （切手は不要です）。

問１． あなたの家族についてお聞きします。

Ａ．あなたが現在、一緒に住んでいる人は、ご自身を合わせて合計何人ですか。合計[　　]人

Ｂ．あなたが現在一緒に住んでいる人はどなたですか。下の１～１４までの数字で**あてはまる数字にすべて**○をつけてください。

1.父親　2. 母親　3. 兄　4.弟　5.姉　6.妹　7.父方の祖父　8.父方の祖母
9.母方の祖父　10.母方の祖母　11.おじ（父母の兄または弟）
11.おば（父母の姉または妹）　12.いとこ　13.その他（具体的に　　）

Ｃ．一緒に住んでいる、住んでいないにかかわらず、あなたが家族だと思っている人はどなたですか？　下の 1～14 までの数字で**あてはまる数字にすべて**○をつけてください。

1.父親 2. 母親　3. 兄 4.弟　5.姉　6.妹　7.父方の祖父　8.父方の祖母
9.母方の祖父　10.母方の祖母　11.おじ（父母の兄または弟）
11.おば（父母の姉または妹）　12.いとこ　13.その他（具体的に　　）

問２． あなたにとって家族はどんな存在ですか。あてはまる番号に○をつけてください。

	そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
Ａ．安らぎを与えてくれる	1	2	3	4
Ｂ．経済的に支えてくれる	1	2	3	4
Ｃ．精神的に支えてくれる	1	2	3	4
Ｄ．教育してくれる	1	2	3	4
Ｅ．困ったときに頼れる	1	2	3	4
Ｆ．家事をしてくれる	1	2	3	4
Ｇ．思ったことを何でも話せる	1	2	3	4
Ｈ．一緒に食事をする	1	2	3	4
Ｉ．一緒に住む	1	2	3	4
Ｊ．喜びや悲しみを分かち合える	1	2	3	4
Ｋ．干渉される	1	2	3	4
Ｌ．わずらわしい	1	2	3	4

問３． 平日、あなたの帰宅時間は、およそ何時ですか。**午前か午後のどちらか１つに○をつけ**数字を書いてください。

午前・午後　[　　]時ごろ　　回答例：午前・午後　[　5　]時ごろ

問４． 平日、一緒に住んでいる家族全員がそろう時間は、およそ何時ですか。

午前・午後　[　　]時ごろ　　回答例：午前・午後　[　7　]時ごろ

問５． あなたは、平均して１日にどのぐらいの時間、つぎの人と会話しますか。下の

1～６から**それぞれ１つずつ**選んで、番号を記入してください。（携帯電話を含む）

ア）父親と　　[　　]
イ）母親と　　[　　]
ウ）きょうだいと　　[　　]
エ）祖父母と　　[　　]
オ）上記以外の家族と　　[　　]
カ）友達と　　[　　]
キ）近所の人と　　[　　]

１．ほとんどない　２．１５分未満　３．１５分～３０分未満
４．３０分～１時間未満　５．１時間～２時間未満　６．２時間以上

問６． あなたは、平均して１日にどのぐらいの回数、つぎの人とメールを交換していますか。下の１～５から**それぞれ１つずつ**選んで、番号を記入してください。

ア）父親と　　[　　]
イ）母親と　　[　　]
ウ）きょうだいと　　[　　]
エ）祖父母と　　[　　]
オ）上記以外の家族と　　[　　]
カ）友達と　　[　　]
キ）近所の人と　　[　　]

１．交換しない　２．１往復　３．２往復～５往復　４．５往復～１０往復
５．１０往復以上

問７． この一年間で、あなたは親とどのぐらい朝食、夕食を一緒に食べましたか。
あてはまる番号に○をつけてください。

	ほぼ毎日	週に１～３回程度	月に１～３回程度	年に数回以下	そもそも食べない
朝食	1	2	3	4	5
夕食	1	2	3	4	5

問８． １ヶ月平均で、あなたは親からおこづかいをいくらくらいもらっていますか。
あてはまる番号に１つ選んで、○をつけてください。

１．もらっていない　２．１千円未満　３．１千円から３千円未満
４．３千円～５千円未満　５．５千円～１万円未満　６．１万円～２万円未満
７．２万円以上　８．その他（具体的に　　）

問９． あなたはつぎのことについて、もっとも話す相手は誰ですか。**あてはまる番号を**

すべて選んでください。

	父親	母親	きょうだい	祖父母	友達	近所の人	その他	誰にも話さない
A. その日学校であった出来事	1	2	3	4	5	6	7	8
B. 友達のこと	1	2	3	4	5	6	7	8
C. 恋愛のこと	1	2	3	4	5	6	7	8
D. 勉強、進路のこと	1	2	3	4	5	6	7	8
E. 趣味、娯楽のこと	1	2	3	4	5	6	7	8
F. 歴史や時事問題	1	2	3	4	5	6	7	8
G. 身体に関すること	1	2	3	4	5	6	7	8
H. 人生にかかわる大きなこと	1	2	3	4	5	6	7	8

問１０． あなたと親の関係について、あてはまる番号を選んで○をつけてください。

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	答えられない
A. 父親はあなたのことを信頼してくれている	1	2	3	4	5
B. 父親はあなたの気持ちをわかってくれている	1	2	3	4	5
C. 父親はあなたのことを愛してくれている	1	2	3	4	5
D. 父親はあなたの行動や考え、友人関係に干渉しすぎる	1	2	3	4	5
E. 父親はあなたの行動や考え、友人関係に関心をもっていない	1	2	3	4	5
F. あなたは父親を信頼している	1	2	3	4	5
H. あなたと父親は仲が良いほうである	1	2	3	4	5
I. 母親はあなたのことを信頼してくれている	1	2	3	4	5
J. 母親はあなたの気持ちをわかってくれている	1	2	3	4	5

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	答えられない
K. 母親はあなたのことを愛してくれている	1	2	3	4	5
L. 母親はあなたの行動や考え、友人関係に干渉しすぎる	1	2	3	4	5
M. 母親はあなたの行動や考え、友人関係に関心をもっていない	1	2	3	4	5
N. あなたは母親を信頼している	1	2	3	4	5
O. あなたと母親は仲が良いほうである	1	2	3	4	5

問１１． あなたの家族についてお聞きします。あてはまる番号を１つ選んで○をつけてください。

	はい	いいえ
A. 問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	1	2
B. 家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある	1	2
C. 困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる	1	2
D. わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	1	2
E. 家の決まりは皆が守るようにしている	1	2
F. わが家はみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	1	2
G. 問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる	1	2
H. わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	1	2
I. たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	1	2
J. わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も心配するが、あまり聞いたりしない	1	2
K. 悩みを家族に相談することがある	1	2
L. 家族はお互いの体によくふれあう	1	2
M. 家族の間で、用事以外の関係は全くない	1	2
N. 家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がない	1	2
O. 休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	1	2
P. 誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	1	2

問１２． あなたは、ご自分の家族のきずなが強いと思いますか。１つ選んで、○をつけてください。

１．そう思う　２．ややそう思う　３．あまりそう思わない　４．そう思わない

問１３． つぎのことがらについて、あてはまる番号を１つ選んで、○をつけてください。

		あてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.	自分に自信がある	1	2	3	4
B.	毎日が楽しい	1	2	3	4
C.	自分の考えややり方が友達とちがっていても気にならない	1	2	3	4
D.	自分の長所も欠点もありのままに認めることができる	1	2	3	4
E.	他人と仲良くすることは大切だと思う	1	2	3	4
F.	はじめての人とでも、ふつうに話ができるほうだ	1	2	3	4
G.	友達にはさまざまな点で負けたくない	1	2	3	4
H.	他人の長所も欠点もありのままに認めることができる	1	2	3	4
I.	自分の将来について非常に不安を感じている	1	2	3	4
J.	自分はどこででもひとりで生きていく自信がある	1	2	3	4
K.	将来、自分の生活費は自分でかせぎたい	1	2	3	4
L.	自分の人生は自分で決める	1	2	3	4

問１４． あなたは、これまでの経験の中で、何をしたことによって、つぎの人とのきずなが強まったと感じますか。つぎの①～⑬の中から**３つまで**番号で答えてください。

父親とのきずな　[　　][　　][　　]

母親とのきずな　[　　][　　][　　]

きょうだいとのきずな　[　　][　　][　　]

祖父母とのきずな　[　　][　　][　　]

①同じ姓を名乗ること　②一緒に住むこと　③一緒に家で食事をしたこと

④一緒に買い物や外食をしたこと　⑤一緒に趣味・スポーツ・ゲームをしたこと

⑥一緒に旅行したこと　⑦一緒にハイキング・キャンプに行ったこと

⑧一緒にお葬式や結婚式に参加したこと　⑨一緒に会話したこと

⑩一緒に困難に立ち向かったこと　⑪一緒に家族の介護、看護をしたこと

⑫自分の気持ちを受け止めてくれたこと　⑬経済的に面倒をみてもらったこと

問１５．あなたは友だちが何人いますか。その中で親友とよべる友達が何人いますか。

友だち[　　]人　　親友[　　]人

問１６．あなたの性別は

１．男性　　２．女性

問１７．あなたの学年は

１．中学１年　２．中学２年　３．中学３年

４．高校１年　５．高校２年　６．高校３年

問１８．あなたの通っている学校は公立ですか、私立ですか。

１．公立　　２．私立

問１９．あなたの住んでいる地域について、あてはまる番号に○をつけてください。

１．但馬　２．丹波　３．阪神北　４．阪神南　５．神戸

６．北播磨　７．中播磨　８．西播磨　９．東播磨　１０．淡路

問２０．あなたの保護者（あなたを養ってくれている人）は、どんなお仕事についていますか。
つぎの中から１つ選び、○をつけてください。

１．農林漁業従事者　２．自営業（農林漁業以外)、自由業　３．家族従業員

４．公務員　５．民間企業の正社員　６．パート・派遣社員・臨時労働者　７．無職

８．その他の職業→（　　）　９．わからない

【自由回答欄】つぎの設問にご自由にお答えください。

（１）あなたにとって理想の「家族のきずな」とは、どんなものですか。

（２）いままでに、家族のきずなが強まったと感じた思い出を書いてください。

★当研究班では、ご両親に対して家族のきずなについての聞き取り調査も企画しており、対象者になってくださるご両親を募集しております。ご協力いただける方は、ぜひお名前とご住所と電話番号をお書きください。

・お名前　　電話番号
・ご住所　　〒

ご協力、大変ありがとうございました。

「(財) ひょうご震災記念２１世紀研究機構」について

私ども（財）ひょうご震災記念２１世紀研究機構は、阪神・淡路大震災の１０年にわたる復興過程の総括検証を通じて、２１世紀文明社会の目標として再認識した「安全・安心なまちづくり」と「共生社会の実現」を着実に推進するため、実践的な政策提言をおこなう総合的シンクタンクとして、２００６年４月、設立されました。

設立以来、政策提言を行うほか、シンポジウムや講演会の開催、啓発資料の発行などの事業を行っています。

理事長　　貝原　俊民
前兵庫県知事
財団法人兵庫地域政策研究機構理事長

2.単純集計

問 1

A.同居家族人数

	度数	%
1人	3	0.1
2人	63	2.5
3人	374	14.6
4人	966	37.8
5人	593	23.2
6人	295	11.5
7人	122	4.8
8人	38	1.5
9人	2	0.1
10人	7	0.3
13人	1	0.0
16人	1	0.0
18人	1	0.0
21人	1	0.0
不明	91	3.6
合計	2558	100

B.　次の人と同居しているか

上段：度数　下段：%

	同居している	同居していない	不明	合計
父親	2175 85.0	321 12.5	62 2.4	2558 100.0
母親	2440 95.4	56 2.2	62 2.4	2558 100.0
兄	624 24.4	1872 73.2	62 2.4	2558 100.0
弟	741 29.0	1755 68.6	62 2.4	2558 100.0
姉	636 24.9	1860 72.7	62 2.4	2558 100.0
妹	660 25.8	1836 71.8	62 2.4	2558 100.0
父方祖父	258 10.1	2238 87.5	62 2.4	2558 100.0
父方祖母	417 16.3	2079 81.3	62 2.4	2558 100.0
母方祖父	132 5.2	2364 92.4	62 2.4	2558 100.0
母方祖母	207 8.1	2289 89.5	62 2.4	2558 100.0
おじ	34 1.3	2462 96.2	62 2.4	2558 100.0
おば	45 1.8	2451 95.8	62 2.4	2558 100.0
いとこ	23 0.9	2473 96.7	62 2.4	2558 100.0

C.同居している、していないにかかわらず、次の人を家族と認識しているか

上段：度数　下段：%

	認識している	認識していない	不明	合計
父親	2020	399	139	2558
	79.0	15.6	5.4	100.0
母親	2142	277	139	2558
	83.7	10.8	5.4	100.0
兄	768	1651	139	2558
	30.0	64.5	5.4	100.0
弟	709	1710	139	2558
	27.7	66.8	5.4	100.0
姉	691	1728	139	2558
	27.0	67.6	5.4	100.0
妹	643	1776	139	2558
	25.1	69.4	5.4	100.0
父方祖父	1062	1357	139	2558
	41.5	53.0	5.4	100.0
父方祖母	1249	1170	139	2558
	48.8	45.7	5.4	100.0
母方祖父	1160	1259	139	2558
	45.3	49.2	5.4	100.0
母方祖母	1330	1089	139	2558
	52.0	42.6	5.4	100.0
おじ	631	1788	139	2558
	24.7	69.9	5.4	100.0
おば	636	1783	139	2558
	24.9	69.7	5.4	100.0
いとこ	731	1688	139	2558
	28.6	66.0	5.4	100.0

問 2.家族の存在　　上段：度数　下段：%

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	不明	合計
A.安らぎを与えてくれる	895	1046	441	158	18	2558
	35.0	40.9	17.2	6.2	0.7	100.0
B.経済的に支えてくれる	1780	605	108	49	16	2558
	69.6	23.7	4.2	1.9	0.6	100.0
C.精神的に支えてくれる	998	958	452	139	11	2558
	39.0	37.5	17.7	5.4	0.4	100.0
D.教育してくれる	1157	967	317	106	11	2558
	45.2	37.8	12.4	4.1	0.4	100.0
E.困ったときに頼れる	1133	922	376	117	10	2558
	44.3	36.0	14.7	4.6	0.4	100.0
F.家事をしてくれる	1817	582	105	38	16	2558
	71.0	22.8	4.1	1.5	0.6	100.0
G.思ったことを何でも話せる	636	914	676	313	19	2558
	24.9	35.7	26.4	12.2	0.7	100.0
H.一緒に食事をする	1567	689	205	87	10	2558
	61.3	26.9	8.0	3.4	0.4	100.0
I.一緒に住む	1915	495	91	46	11	2558
	74.9	19.4	3.6	1.8	0.4	100.0
J.喜びや悲しみを分かち合える	654	941	685	253	25	2558
	25.6	36.8	26.8	9.9	1.0	100.0
K.干渉される	481	911	799	314	53	2558
	18.8	35.6	31.2	12.3	2.1	100.0
L.わずらわしい	280	688	955	578	57	2558
	10.9	26.9	37.3	22.6	2.2	100.0

問 3.平日の帰宅時間

時	度数	%
0	10	0.4
1	2	0.1
3	1	0.0
6	1	0.0
7	3	0.1
7.5	1	0.0
8	1	0.0
15	9	0.4
15.5	2	0.1
16	244	9.5
16.5	6	0.2
17	371	14.5
17.5	8	0.3
18	455	17.8
18.5	64	2.5
19	704	27.5
19.5	29	1.1
20	397	15.5
20.5	5	0.2
21	114	4.5
21.5	2	0.1
22	70	2.7
22.5	2	0.1
23	25	1.0
不明	32	1.3
合計	2558	100.0

問 4.平日、家族全員がそろう時間

時	度数	%
0	82	3.2
1	23	0.9
2	16	0.6
3	9	0.4
4	3	0.1
5	2	0.1
6	17	0.7
6.5	1	0.0
7	28	1.1
7.5	1	0.0
9	1	0.0
11	1	0.0
12	1	0.0
14	2	0.1
15	2	0.1
16	3	0.1
17	29	1.1
17.5	1	0.0
18	111	4.3
18.5	15	0.6
19	538	21.0
19.5	17	0.7
20	591	23.1
20.5	9	0.4
21	434	17.0
21.5	3	0.1
22	324	12.7
22.5	3	0.1
23	179	7.0
不明	112	4.4
合計	2558	100.0

問5.　次の人との１日平均会話時間

	ほとんどない	15分未満	15分～30分未満	30分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間以上	不明	合計
父親と	710 27.8	597 23.3	426 16.7	390 15.2	205 8.0	142 5.6	88 3.5	100.0 2,558
母親と	166 6.5	383 15.0	527 20.6	585 22.9	433 16.9	423 16.5	41 1.6	100.0 2,558
きょうだいと	530 20.7	384 15.0	366 14.3	451 17.6	315 12.3	354 13.8	158 6.2	100.0 2,558
祖父母と	1429 55.9	368 14.4	248 9.7	167 6.5	116 4.5	73 2.9	157 6.1	100.0 2,558
上記以外の家族と	1834 71.7	187 7.3	119 4.7	75 2.9	56 2.2	65 2.5	8.7 222	100.0 2,558
友達と	90 3.5	86 3.4	110 4.3	309 12.1	492 19.2	1388 54.3	3.2 83	100.0 2,558
近所の人と	1863 72.8	387 15.1	95 3.7	35 1.4	14 0.5	25 1.0	5.4 139	100.0 2,558

問 6.　次の人との 1 日平均メール交換回数　　上段：度数、下段：%

	交換しない	1往復	2往復～5往復	5往復～10往復	10往復以上	不明	合計
父親と	1947 76.1	327 12.8	133 5.2	9 0.4	8 0.3	134 5.6	100.0 2,558
母親と	1372 53.6	621 24.3	400 15.6	48 1.9	12 0.5	105 4.1	100.0 2,558
きょうだいと	1868 73.0	272 10.6	162 6.3	33 1.3	17 0.7	216 8	100.0 2,558
祖父母と	2231 87.2	96 3.8	33 1.3	7 0.3	6 0.2	185 7.2	100.0 2,558
上記以外の家族と	2140 83.7	98 3.8	74 2.9	23 0.9	17 0.7	206 8.1	100.0 2,558
友達と	550 21.5	147 5.7	500 19.5	435 17.0	830 32.4	96 4	100.0 2,558
近所の人と	2293 89.6	30 1.2	27 1.1	7 0.3	21 0.8	180 7.1	100.0 2,558

問7.　親との食事頻度　　上段：度数、下段：%

	ほぼ毎日	週に1～3回程度	月に1～3回程度	年に数回以下	そもそも食べない	不明	合計
朝食	43.8 1,120	16.0 409	10.7 274	17.4 445	11.5 295	0.6 15	100.0 2,558
夕食	66.7 1,706	21.3 545	5.5 141	2.6 66	1.7 44	2.2 56	100.0 2,558

問8.　親からもらうおこづかいの一ヶ月平均金額　　上段：度数、下段：%

もらってない	1千円未満	1千円～3千円未満	3千円～5千円未満	5千円～1万円未満	1万円～2万円未満	2万円以上	その他	不明	合計
689 26.9	158 6.2	456 17.8	494 19.3	447 17.5	144 5.6	32 1.3	118 4.6	20 0.8	2558 100.0

問 9.　話題別話し相手　　上段：度数、下段：%

	父親	母親	きょうだい	祖父母	友達	近所の人	その他	誰にも話さない
その日学校であった事	428 16.7	1,536 60.0	457 17.9	132 5.2	845 33.0	20 0.8	77 3	342 13.4
友達の事	332 13.0	1,227 48.0	415 16.2	78 3	1,023 40	12 0.5	74 2.9	381 14.9
恋愛の事	51 2.0	153 6.0	160 6.3	17 0.7	1,086 42.5	9 0.4	100 3.9	1,176 46
勉強・進路のこと	710 27.8	1375 54	211 8.2	108 4.2	739 28.9	15 0.6	147 5.7	414 16.2
趣味、娯楽のこと	471 18.4	637 24.9	543 21.2	102 4.0	1,407 55	22 0.9	96 3.8	393 15.4
歴史や時事問題	532 20.8	511 20	175 6.8	126 4.9	361 14.1	9 0.4	98 3.8	1,158 45.3
身体に関すること	277 10.8	793 31.0	157 6.1	55 2.2	627 24.5	7 0.3	86 3.4	1,042 40.7
人生にかかわる大きなこと	800 31.3	1,198 46.8	229 9	139 5.4	462 18.1	14 0.5	107 4.2	774 30.3

問 10.　親との関係　　上段：度数、下段：%

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	答えられない	不明	合計
父親はあなたのことを信頼してくれている	824 32.2	898 35.1	369 14.4	180 7.0	246 9.6	41 1.6	2558 100.0
父親はあなたの気持ちをわかってくれている	577 22.6	850 33.2	554 21.7	304 11.9	233 9.1	40 1.6	2558 100.0
父親はあなたのことを愛してくれている	855 33.4	871 34.1	328 12.8	162 6.3	300 11.7	42 1.6	2558 100.0
父親はあなたの行動や考え、友人関係に干渉しすぎる	226 8.8	343 13.4	705 27.6	954 37.3	275 10.8	55 2.2	2558 100.0
父親はあなたの行動や考え、友人関係に関心をもっていない	229 9.0	408 15.9	842 32.9	755 29.5	277 10.8	47 1.8	2558 100.0
あなたは父親を信頼している	1006 39.3	803 31.4	302 11.8	178 7.0	221 8.6	48 1.9	2558 100.0
あなたは父親と仲が良いほうである	908 35.5	818 32.0	340 13.3	239 9.3	209 8.2	44 1.7	2558 100.0
母親はあなたのことを信頼してくれている	1097 42.9	872 34.1	319 12.5	115 4.5	136 5.3	19 0.7	2558 100.0
母親はあなたの気持ちをわかってくれている	874 34.2	913 35.7	447 17.5	176 6.9	130 5.1	18 0.7	2558 100.0
母親はあなたのことを愛してくれている	1070 41.8	941 36.8	273 10.7	84 3.3	170 6.6	20 0.8	2558 100.0
母親はあなたの行動や考え、友人関係に干渉しすぎる	337 13.2	600 23.5	795 31.1	624 24.4	166 6.5	36 1.4	2558 100.0
母親はあなたの行動や考え、友人関係に関心をもっていない	142 5.6	288 11.3	851 33.3	1086 42.5	166 6.5	25 1.0	2558 100.0
あなたは母親を信頼している	1199 46.9	827 32.3	265 10.4	121 4.7	125 4.9	21 0.8	2558 100.0
あなたと母親は仲が良いほうである	1163 45.5	875 34.2	295 11.5	88 3.4	117 4.6	20 0.8	2558 100.0

問 11.家族について　　上段：度数、下段：%

	はい	いいえ	不明	合計
問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	1016 39.7	1512 59.1	30 1.2	2558 100.0
家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎなうこともある	1335 52.2	1187 46.4	36 1.4	2558 100.0
困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる	732 28.6	1791 70.0	35 1.4	2558 100.0
わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	1376 53.8	1137 44.4	45 1.8	2558 100.0
家の決まりは皆が守るようにしている	1482 57.9	1035 40.5	41 1.6	2558 100.0
わが家はみんなで約束してことでもそれを実行することはほとんどない	756 29.6	1756 68.6	46 1.8	2558 100.0
問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見が通る	842 32.9	1664 65.1	52 2.0	2558 100.0
わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	506 19.8	1997 78.1	55 2.2	2558 100.0
たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	1974 77.2	545 21.3	39 1.5	2558 100.0
わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も心配するが、あまり聞いたりしない	1056 41.3	1452 56.8	50 2.0	2558 100.0
悩みを家族に相談することがある	1297 50.7	1221 47.7	40 1.6	2558 100.0
家族はお互いの体によくふれあう	562 22.0	1945 76.0	51 2.0	2558 100.0
家族の間で、用事以外の関係は全くない	467 18.3	2031 79.4	60 2.3	2558 100.0
家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がない	797 31.2	1699 66.4	62 2.4	2558 100.0
休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	2150 84.1	374 14.6	34 1.3	2558 100.0
誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	474 18.5	2049 80.1	35 1.4	2558 100.0

問 12.　家族の絆が強いと思うか　　上段：度数、下段：%

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	不明	合計
777 30.4	1058 41.4	447 17.5	139 5.4	137 5.4	2558 100.0

問 13.　自己に対する評価　　上段：度数、下段：%

	あてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	不明	合計
A.自分に自信がある	363 14.2	801 31.3	939 36.7	423 16.5	32 1.3	2558 100.0
B.毎日が楽しい	900 35.2	1117 43.7	381 14.9	133 5.2	27 1.1	2558 100.0
C.自分の考えややり方が友達とちがっていても気にならない	783 30.6	926 36.2	636 24.9	181 7.1	32 1.3	2558 100.0
D.自分の長所も欠点もありのままに認めることができる	894 34.9	1048 41.0	452 17.7	135 5.3	29 1.1	2558 100.0
E.他人と仲良くすることは大切だと思う	1807 70.6	581 22.7	95 3.7	52 2.0	23 0.9	2558 100.0
F.　はじめての人とでも、ふつうに話ができるほうだ	716 28.0	782 30.6	705 27.6	331 12.9	24 0.9	2558 100.0
G.友達にはさまざまな点で負けたくない	760 29.7	983 38.4	585 22.9	203 7.9	27 1.1	2558 100.0
H.他人の長所も欠点もありのままに認めることができる	854 33.4	1219 47.7	378 14.8	77 3.0	30 1.2	2558 100.0
I.自分の将来について非常に不安に感じている	869 34.0	864 33.8	548 21.4	251 9.8	26 1.0	2558 100.0
J.自分はどこででもひとりで生きていく自信がある	344 13.4	667 26.1	993 38.8	525 20.5	29 1.1	2558 100.0
K.将来、自分の生活費は自分でかせぎたい	1510 59.0	804 31.4	156 6.1	61 2.4	27 1.1	2558 100.0
L.自分の人生は自分で決める	1455 56.9	868 33.9	153 6.0	54 2.1	28 1.1	2558 100.0

問 14　家族の絆が強まった経験

	父親との絆	母親との絆	きょうだいとの絆	祖父母との絆
同じ姓を名乗ること	596 23.3	514 20.1	487 19	477 18.6
一緒に住むこと	1290 50.4	1348 52.7	1202 47.0	630 24.6
一緒に家で食事したこと	777 30.4	866 33.9	732 28.6	874 34.2
一緒に買い物や外食をしたこと	445 17.4	765 29.9	397 15.5	727 28.4
一緒に趣味・スポーツ・ゲームをしたこと	638 24.9	241 9.4	1028 40.2	161 6.3
一緒に旅行したこと	547 21.4	541 21.1	416 16.3	508 19.9
一緒にハイキング・キャンプに行ったこと	144 5.6	82 3.2	122 4.8	100 3.9
一緒にお葬式や結婚式に参加したこと	52 2.0	62 2.4	72 2.8	200 7.8
一緒に会話したこと	629 24.6	802 31.4	866 33.9	1098 42.9
一緒に困難に立ち向かったこと	130 5.1	246 9.6	145 5.7	116 4.5
一緒に家族の介護、看護をしたこと	34 1.3	79 3.1	37 1.4	116 4.5
自分の気持ちを受け止めてくれたこと	255 10.0	456 17.8	147 5.7	291 11.4
経済的に面倒をみてもらったこと	590 23.1	459 17.9	48 1.9	404 15.8

問15.　友達の人数、親友の人数

友達の人数

友達の数	度数	%
0	46	1.8
1	16	0.6
2	8	0.3
3	20	0.8
4	14	0.5
5	49	1.9
6	20	0.8
7	13	0.5
8	22	0.9
9	21	0.8
10	165	6.5
11	8	0.3
12	15	0.6
13	8	0.3
14	4	0.2
15	83	3.2
16	2	0.1
17	9	0.4
18	12	0.5
19	1	0.0
20	186	7.3
21	7	0.3
22	4	0.2
23	7	0.3
24	4	0.2
25	17	0.7
26	4	0.2
28	2	0.1
29	2	0.1
30	166	6.5
31	1	0.0
32	2	0.1
34	2	0.1
35	13	0.5
36	1	0.0
37	1	0.0
38	5	0.2
39	5	0.2
40	59	2.3
41	2	0.1
42	1	0.0
43	2	0.1
44	6	0.2
45	10	0.4
46	2	0.1
47	1	0.0
50	208	8.1
51	2	0.1
52	5	0.2
53	3	0.1
54	2	0.1
55	4	0.2
60	50	2.0
62	4	0.2
63	1	0.0
64	1	0.0
65	9	0.4
67	1	0.0
70	23	0.9
72	2	0.1
75	7	0.3
76	1	0.0
77	2	0.1
80	29	1.1

85	2	0.1
88	1	0.0
90	12	0.5
92	1	0.0
94	1	0.0
96	2	0.1
98	1	0.0
100	352	13.8
103	1	0.0
109	1	0.0
112	1	0.0
120	5	0.2
121	1	0.0
123	1	0.0
125	2	0.1
130	1	0.0
135	1	0.0
136	1	0.0
138	1	0.0
140	3	0.1
150	35	1.4
154	1	0.0
155	2	0.1
160	5	0.2
170	1	0.0
180	2	0.1
190	1	0.0
191	1	0.0
200	63	2.5
202	1	0.0
211	2	0.1
218	1	0.0
250	5	0.2
268	1	0.0
280	1	0.0
300	24	0.9
350	1	0.0
353	1	0.0
384	1	0.0
400	4	0.2
500	101	3.9
999	510	19.9
不明	1	0.0
合計	2558	100.0

親友の人数

親友の数	度数	%
0	136	5.3
1	243	9.5
2	224	8.8
3	306	12.0
4	134	5.2
5	313	12.2
6	74	2.9
7	47	1.8
8	35	1.4
9	21	0.8
10	273	10.7
11	7	0.3
12	13	0.5
13	5	0.2
14	3	0.1
15	43	1.7
16	2	0.1
17	5	0.2
18	5	0.2
19	1	0.0
20	68	2.7
21	2	0.1
23	3	0.1
24	1	0.0
25	11	0.4
26	1	0.0
28	1	0.0
30	33	1.3
31	1	0.0
33	2	0.1
37	1	0.0
38	2	0.1
40	9	0.4
41	1	0.0
42	1	0.0
44	1	0.0
48	2	0.1
50	32	1.3
54	1	0.0
60	3	0.1
62	1	0.0
63	1	0.0
64	1	0.0
80	1	0.0
100	72	2.8
121	1	0.0
140	1	0.0
149	1	0.0
150	7	0.3
200	3	0.1
201	1	0.0
210	1	0.0
250	2	0.1
300	3	0.1
500	35	1.4
999	358	14.0
不明	3	0.1
合計	2558	100.0

問16. 性別

	度数	%
男性	1817	71.0
女性	706	27.6
不明	35	1.4
合計	2558	100.0

問17.　学年

	度数	%
中学1年	360	14.1
中学2年	382	14.9
中学3年	334	13.1
高校1年	461	18.0
高校2年	577	22.6
高校3年	412	16.1
不明	32	1.3
合計	2558	100.0

問18.　通っている学校が公立か私立か

	度数	%
公立	1402	54.8
私立	1108	43.3
不明	48	1.9
合計	2558	100.0

問19.　居住地

	度数	%
但馬	366	14.3
丹波	9	0.4
阪神北	109	4.3
阪神南	591	23.1
神戸	488	19.1
北播磨	7	0.3
中播磨	44	1.7
西播磨	331	12.9
東播磨	333	13.0
淡路	118	4.6
大阪	37	1.4
不明	125	4.9
合計	2558	100.0

問20.　保護者の仕事

	度数	%
農林漁業従業者	47	1.8
自営業（農林漁業以外）、自由業	499	19.5
家族従業員	20	0.8
公務員	258	10.1
民間企業の正社員	695	27.2
パート、派遣社員、臨時労働者	135	5.3
無職	30	1.2
その他	270	10.6
わからない	400	15.6
不明	204	8.0
合計	2558	100.0

青少年の生き方を支える「家族の絆」の構築戦略

報告書

◆発行　　(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
研究調査本部　共生社会づくり政策研究群

〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5番2号
TEL：078-262-5579　　FAX：078-262-5593
http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/index.html

平成２２年３月